２０１２年度　事業の概要

１ 調査と研究 …… 28
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 28
平城京の発掘調査 …… 28
企画調整部の研究活動 …… 30
文化遺産部の研究活動 …… 30
●歴史研究室の調査と研究 …… 30
●建造物研究室の調査と研究 …… 31
●景観研究室の調査と研究 …… 32
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 32
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 32
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 32
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 33
●年代学研究室の調査と研究 …… 33
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 34
国際学術交流 …… 34
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 34
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●中国河南省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 35
●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業 …… 36
●中央アジアにおける研究協力 …… 36
●西トップ遺跡の保存と修復 …… 36
●コロンビア大学との研究交流 …… 36
海外からの主要訪問者一覧 …… 37
海外からの招聘者一覧 …… 39
研究者の海外渡航一覧 …… 39
公開講演会 …… 43
特別講演会（東京会場） …… 43
日中韓国際講演会 …… 44
第110回公開講演会 …… 44
第111回公開講演会 …… 44
研究集会 …… 45
科学研究費等 …… 46
学会・研究会等の活動 …… 50
国が実施する事業等についての調査・協力 …… 50
●平城宮跡の整備 …… 50
●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査 …… 51
●キトラ古墳に関する調査研究 …… 51
発掘調査現地説明会・見学会 …… 51

２ 研修・指導と教育 …… 52
文化財担当者研修と指導 …… 52
京都大学（大学院）との連携教育 …… 52
奈良女子大学（大学院）との連携教育 …… 52
奈良大学への教育協力 …… 52

３ 展示と公開 …… 54
飛鳥資料館の展示 …… 54
平城宮跡資料館の展示 …… 54
解説ボランティア事業 …… 55
奈文研概要掲載文書 …… 55

４ その他 …… 56
刊行物 …… 56
人事異動 …… 60
予算等 …… 61
職員一覧 …… 62

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2012年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で２件、藤原京跡と飛鳥地域で５件である。また、立会調査は６件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡では、朝堂院朝廷（第174次）と東方官衙北地区（第175次）の調査を実施した。

第174次調査は、2008年度の第153次調査以降取り組んでいる、朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明にむけた調査の一環として実施した。朝庭東北部の土地利用のあり方を検討するとともに、その下層における遺構の具体的な状況をあきらかにすることを目的として、調査区は朝庭の東北部、第163・169次調査区の西に、面積1,850㎡で設定した。調査は2012年４月２日から開始し、12月17日に終了した。

藤原宮期の遺構としては、広場SH10800の礫敷を調査区全面で確認した。本調査区では、朝庭中央部で確認された石詰暗渠等は設けられておらず、藤原宮期の遺構は他に確認されなかった。

藤原宮造営期の遺構としては、３棟の掘立柱建物と、その東に南北方向の柱列を複数検出した。掘立柱建物は第169次で検出した７棟の掘立柱建物と一群となるもので、これらの建物は①第一次整地土上面あるいは地山上面、②第二次整地土下層、③第二次整地土上層の３時期に分けることができる。調査区北側では沼状遺構SX10820の南端を確認し、第二次整地土で埋め立てられていることを追認した。また、礫敷より下位の第二次整地土中には、SX10820とほぼ重複する範囲で木屑を含む土層がある。調査区北東部には、広場SH10800礫敷上面に窪みがあり、その下層はとくに木屑が密集して堆積している状況（木屑溜りSU11122）を確認した。木屑は藤原宮造営時の木材加工で生じたもので、木屑の廃棄と宮の造成が同時に進行していたものとみられ、藤原宮造営過程の一端があきらかにすることができた。

東方官衙北地区の調査（第175次）の調査地は、藤原宮の中心建物である大極殿の約300ｍ東、東方官衙北地区の南西部に位置する。調査区周辺では、東方官衙を構成する廂付南北棟建物や、長大な東西棟建物、内裏東官衙の区画塀や建物、東西方向の宮内道路等を検出している。東方官衙東地区のさらなる確認を目的として、調査区は内裏東官衙から延びる宮内道路の東側延長上に設定した。調査は2012年４月２日から開始し、６月25日に終了した。調査面積は494㎡である。

藤原宮期の遺構としては、東方官衙区画塀、掘立柱建物、礎石建物等を検出した。東方官衙区画塀SA8571は既検出分とあわせると総長30ｍを確認した。SA8571は２ｍ南側に東西溝SD10098をともない、設置直前には地割溝とみられるSD11099を掘削している。掘立柱東西棟建物SB8572は、区画塀SA8571の2.5ｍ北に位置する。既検出分とあわせると、桁行12間（26ｍ）以上、梁行２間以上という長大な東西棟建物になる。本調査区北側でも、桁行９間～12間（26～35ｍ）の長大な東西棟建物を数棟検出している。南北棟礎石建物SB11100は、区画塀SA8571の南側に位置する。根石が残る礎石据付穴を７基検出し、規模は桁行３間以上、梁行２間以上、礎石建物を藤原宮東方官衙地区で発見したのは今回が初めてである。想定された、内裏東官衙から延びる宮内道路南側の区画塀は検出されず、東方官衙区画の南側には礎石建物が建つ空間があったことが判明した。

藤原宮期以前の遺構としては、掘立柱建物SB8579・11102を検出しており、時期は７世紀後半～藤原宮期直前とみられる。藤原宮期廃絶後の遺構としては、総柱建物SB11090・掘立柱建物SB11091等を確認した。柱穴の規模や規格性、建物配置の規則性から、計画的に建設された建物群と推定される。宮廃絶後にも何らかの施設が存在した可能性がある。

2012年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会は以下の通りである。

飛鳥藤原第174次調査（藤原宮朝堂院朝庭）
　現地説明会　2012年11月23日　今井晃樹

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区で2012年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で４件、平城京跡で14件である。また、立会調査は29件である。以下に主要な調査の概要を記す。

平城宮内では東院地区を調査した（第503次）。調査区は第423次調査区の北、第446次の東に設定し、調査面積は1,015㎡である。調査は2012年12月17日に開始し、奈良時代を中心とした遺構を検出した。奈良時代の東院地区は、１～６期の遺構変遷が確認されており、今回の調査でも各時期の建物や塀等を多数検出した。なかでも、６期の回廊状遺構を検出し、当該期の中枢施設の北西隅を確定した。これまでの調査成果をふまえると、単廊とみられる施設で区画された空間が、規模や位置を変えながらも継続的に使用されて

いたことがあきらかになった。このほか、平瓦を外装に用いた基壇状遺構を確認したこと等、多くの成果があがった。

平城京内では、国土交通省による平城宮跡展示館建設予定地の事前調査として、朱雀門の南東一帯（左京三条一坊一・二坪）の調査を前年度より継続して実施した（第491・495次）。調査期間は2012年４月２日から10月16日まで、調査面積は計1,845㎡である。一連の調査により、左京三条一坊一坪と二坪北辺の様相があきらかになった。調査区は北調査区と南調査区に分かれるが、北調査区では、奈良時代前半の鉄鍛冶工房１棟とその工房域を区画する塀と溝を検出した。2011年度の調査で確認した分を含め、これで当該地の鉄鍛冶工房は計４棟となったが、今回確認した工房SX10100がもっとも古く、その後第486次調査で確認された３棟へ操業が移行していったと考えられる。なおSX10100では、礫据炉と仮称した特異な構造をもつ鍛冶炉を検出した。鉄鍛冶工房廃絶後、一帯は整地され、井戸SE9650等が設けられた。

南調査区では掘立柱建物７棟を検出した。そのうちの３棟は、南妻で柱筋が揃う等規格性が高く、同時期に営まれたと考えられる。長舎であるSB10000や、総柱建物SB9999等が整然と配置される様子は、京内の一般的な宅地利用のあり方とは一線を画し、北調査区の鉄鍛冶工房との関連も想定できる。このほか、三条条間北小路SF9670および南北両側溝SD9671・9672等も確認した。

このほか、平城京内では、複数の寺院堂宇の調査を実施した。

東大寺法華堂の調査（第492次）は、正堂須弥壇の修理事業にともなうもので、木製須弥壇の下に18.5㎡の調査区を設け、2012年４月10日から５月28日までおこなった。奈良県立橿原考古学研究所と合同調査である。調査の結果、法華堂正堂から東側の手水屋にかけての広範囲で地山を平坦に造成したこと、須弥壇下の基壇は、版築によって上部ほど丁寧に硬く搗き固めていたこと等が判明した。版築層からは、奈良時代の瓦や土器の細片が少量出土し、遺構は検出されなかった。また、地山から20㎝上で礎石据付穴の掘り込み面を確認し、基壇土下半で礎石据付穴を掘削した後に礎石を設置したことがあきらかになった。礎石の据え付け状況と出土遺物から、基壇土の大部分は、奈良時代中頃とされる創建段階の所産と考えられ、既往の研究で推定されてきた法華堂の創建時期と齟齬がない。このほか、基壇東側が湿潤、西側が比較的乾燥という土壌内の含水比が異なることが調査の過程であきらかになったが、これは調査に先行して実施した電気探査結果と符合する等の成果も得た。

薬師寺境内保存整備計画にもとづき、薬師寺食堂跡を全面的に調査した（第500次）。調査は2012年９月24日から2013年３月25日まで、調査面積は1,350㎡である。調査の結果、薬師寺食堂は東西46.9ｍ、南北21.6ｍの基壇をもつ礎石建物で、建物の規模は、桁行11間、梁行４間、東西40.7ｍ、南北15.4ｍと、東大寺や大安寺に次ぐ規模であったことが判明した。基壇は、まず地山上を整地し、その上を版築によって築成し、礎石位置にのみ直径２～2.8ｍの大きな掘方を掘削し、版築で積み固める壺地業をおこない、そのうえに礎石を設置し、更に基壇上面まで版築するという複雑な築造工程を経たこともあきらかになった。また、瓦や土器等出土遺物の検討から、食堂が14世紀初頭頃までに廃絶していたこと、更に食堂造営以前にさかのぼる遺構を確認したこと等の成果が得られた。

西大寺旧境内の調査（第505次）は、2013年２月12日から開始し、西大寺薬師金堂の西側に取り付く軒廊および西面回廊の一部を検出した。検出した軒廊は従来想定されてきた単廊でなく複廊であること、西面回廊を構成する礎石据付穴と、雨落溝、石敷きの暗渠状遺構を検出する等の成果があがった。

寺院以外の調査では、法華寺阿弥陀浄土院の東隣の坪である平城京左京二条二坊十五坪の調査を実施した（第501次）。調査は2012年11月５日から12月14日まで、調査面積は約320㎡である。調査の結果、掘立柱建物３棟以上、掘立柱塀２条以上、柱穴列６条以上、溝６条、土坑12基以上を確認し、５期の遺構変遷に区分できることがあきらかになった。このうち東西溝で区画される１期から、これを埋めて南北棟や東西棟の建物が展開する２・３期、ふたたび東西塀によって区画する４期と、坪内の空間利用が変化することが判明した。

発掘調査にともない実施した現地説明会は、以下のとおりである。

平城第491次調査（平城京左京三条一坊一坪）
　2012年６月23日　山本祥隆
平城第495次調査（平城京左京三条一坊一・二坪）
　2012年９月15日　川畑　純
平城第500次調査（薬師寺食堂跡）
　2013年１月26日　石田由紀子
平城第503次調査（平城宮東院地区）
　2013年３月30日　小田裕樹

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に係るさまざまな事業についての全体的・総合的な企画とその調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査やその成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を、年度ごとに計画を立案して実施している。2012年度は、従来からの課程に加えて、新たに「古文書歴史資料調査管理基礎課程」「文化的景観調査計画課程」「庭園・自然名勝等保存活用課程」を実施した。今後も、地方公共団体からの要望や学術研究の進展に合わせて、研修内容の改良をおこなっていく予定である。

文化財情報電子化の研究では、遺跡データベースと報告書抄録データベースの構築に関する研究成果を『遺跡情報交換標準の研究第三版』として公表するとともに、学会発表もおこなった。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・大判フィルム・35㎜スライドフィルム・遺構実測図・遺構カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、2012年９～10月に実施された集団研修でアジア太平洋地域の16カ国から16名の研修生を招き、遺跡の調査と保存に関する研修をおこない、個人研修でインドネシアから３名の研修生を招き、木造建造物の保存と修復についての実習をおこなった。

諸外国との国際共同研究としては、中国の社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究所、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。また、2012年９月と2013年１月にはベトナム・ハノイにおいて、ユネスコ日本信託基金によるタンロン皇城遺跡の出土遺物の分析法に関する研修を実施した。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トップ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、目下、南祠堂の解体修理を進めている。このほか、文化庁受託事業によるカンボジア文化芸術省との拠点交流事業において、ポスト・アンコール期の遺跡群の共同研究および研究交流を実施した。

展示公開および普及については、飛鳥資料館での関係資料の研究とその成果の展示公開、平城宮跡資料館での宮跡調査の成果の展示公開等の事業を実施した。このうち、飛鳥資料館では、第１展示室を一時閉鎖し、内装、照明の改装をおこなった。2013年２月から仮オープンしているが、来館者から新しく、明るくなったと好評である。今後、展示物についても改装をおこなっていく予定である。そうしたなか、特別展として「比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―」と「花開く都城文化」を、企画展として「飛鳥の考古学2012」をそれぞれ開催した。平城宮跡資料館では、奈良文化財研究所創立60周年・秋期特別展「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」と、春期企画展「発掘速報展 平城 2011」を開催した。これらについては別項を参照されたい。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。

各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2012年度は、興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺・氷室神社大宮家や、奈良の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺調査は、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、第115函～第117函の調書を作成した。写真は第104函～第106函を撮影した。

仁和寺調査は、『仁和寺史料 目録編〔稿〕』の続編公表のための調査として、御経蔵聖教第44～第46函の調書原本校正、第41函～第49函の写真撮影を実施した。また第150函所収の中世文書について、釈文の原本校正をおこない、『仁和寺史料　古文書編一』として公表した。そこには未報告の中世寺領関係文書が多数含まれており、注目すべきものである。

薬師寺調査は、第56～第59函の調書作成と、第25函の写真撮影を実施した。

三仏寺調査は、近世文書が納められている第３函の調書を作成し、第３函～第５函の写真撮影を実施した。また、所蔵する神像・瓦経の調査を実施した。瓦経は鳥取県倉吉市の大日寺出土の院政期の瓦経で、その成果を「大日寺瓦経の研究―三仏寺所在分を中心に―」として『文化財論叢Ⅳ』に公表した。この報告により、最古の紀年銘瓦経として有名な大日寺瓦経について、その全体像を提示できたと考えている。

また唐招提寺の調査を実施し、戒学院に所在する歴史資料の確認をおこなった。

氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で連携研究をおこない、未成巻文書について、昨年度までに作成した調書の校正作業をおこなった。

さらに、奈良市六条町水利組合所蔵の絵図・簿冊の調査、奈良市佐紀町溝辺家所蔵の元明天皇像の調査、天理市杣之内町岡田家所蔵の内山永久寺旧蔵扁額の調査をおこなった。また昨年度の調査成果に基づき、「平城宮跡保存運動のはじまり―石崎勝蔵関係資料から―」を『奈良文化財研究所紀要2012』に報告した。

その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査・文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等にかんする調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の祭に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2012年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築にかんする調査研究では、2009年度に始まった法隆寺所蔵の古材調査を継続して進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した、昭和修理に際し再用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、当研究所が部材の実測、加工痕調査、写真撮影等をおこなった。2012年度までに金堂の旧部材約2,000点の調査を終了し2013年度以降も調査を継続する予定である。

受託調査として、竹林寺客殿建築・庭園調査、延暦寺建物悉皆調査、旧高梁尋常高等小学校建築調査、兵庫県近代和風建築総合調査、松阪長谷川家建築調査、塩尻市平出地区伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。竹林寺客殿・庭園調査は高知市の竹林寺客殿の文化財的な価値をあきらかにするための調査である。延暦寺建物悉皆調査は比叡山延暦寺の管理する全ての建築を対象とした所在調査と、重要な物件についての２次調査である。旧高梁尋常高等小学校建築調査は高梁市街地にのこる明治洋風建築の詳細調査である。以上については本年度報告書を刊行した。兵庫県近代和風建築総合調査は、兵庫県が2011年度からはじめた調査で、当研究所は主としてリストにあげられた個々の物件にかんする実測、写真撮影、所見執筆等の２次調査を現地に赴いておこなっている。松阪長谷川家建築調査は松阪市魚町に残る伊勢商人の本宅の建築調査である。塩尻市平出地区伝統的建造物群保存対策調査は信州特有の本棟造民家の多く残る平出地区の保存に向けての調査である。以上３件は、いずれも2013年度に継続しておこなう予定である。

海外との共同研究として中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所とともに建築文化遺産にかんする共同研究をおこなっており、2012年度は韓国ソウルでおこなわれた「建築遺跡保存」をテーマとした国際学術会議に出席し発表をおこなった。

国外調査として、文化庁の海外協力事業に協力し、ベトナム南部フーホイ村、カイベイ市の集落町並み保存対策調査をおこない、このうちホーチミン市近郊フーホイ村の調査報告書を出版した。

調査研究の一環として、奈文研所蔵資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と文化財建造物の修理時の復原等を主な内容とする現状変更説明資料の刊行を継続しておこなっている。2012年度に刊行した現状変更説明資料は1950～1952年度分である。

このほか、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業、伝統的建造物群保存事業等について援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、「文化的景観」を中心として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。特に2011年度からは諸外国との比較検討を視野に入れながら、日本の文化的景観保護行政に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めている。また、文化的景観の具体的事例に関する取組としては、地方公共団体からの受託研究等により実施し、保護措置の諸問題について検討している。

2012年度は、文化的景観の文化財としての概念の定着と保存・活用の促進等を図るため、2009年度から開催してきた「文化的景観学研究会」を踏まえつつ、新たに『「文化的景観学」検討会』として、文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等について、体系化に向けた検討に着手した。文化的景観に関する情報・動向等の共有の場として2008年度以来例年実施の文化的景観研究集会（第５回）については、『文化的景観のつかい方』をテーマに、滋賀県立安土城考古博物館を会場として、企画展「暮らしが生んだ絶景琵琶湖 水辺の文化的景観」の会期に合わせ、「近江八幡の水郷」の現地見学会とともに開催した。

諸外国との比較検討の観点からは、特に世界遺産の文化的景観に関わる諸資料の調査をおこなうとともに、日本の文化的景観保護施策に資するため、日本語版資料の作成等を進めるとともに、2010年度のアメリカ合衆国での調査等に引き続き、ヨーロッパやアジア各国の文化的景観に関わる取組について現状の把握と検討を進めている。

個別の文化的景観の調査・計画等に関する検討としては、岡崎（京都市）、相川（佐渡市）、長良川流域（岐阜市）について取組を進めた。特に、岡崎および相川については、文化的景観としての内容および価値に関する調査報告を取りまとめ、引き続き保存計画策定の検討を進めるとともに、住民ワークショップ等の諸活動についても協力した。また、重要文化的景観に選定されている「宇治の文化的景観」や「四万十川流域の文化的景観」においても、整備計画策定に関して支援等をおこなっている。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、記念物保護に関する総合的な調査と研究を実施しており、特に「遺跡等整備」および「庭園」に関する調査研究の２つを柱としている。

「遺跡等整備」については、国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念、計画・設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2008年度以来、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室の協力の下に基幹的な調査研究として取り組んで来た「遺構露出展示に関する調査研究」については、遺構露出展示に関する国内的な情報共有を趣旨として『遺構露出展示に関する調査研究報告書』および『日本における遺構露出展示に関するデータベース（α版FY2012）』を取りまとめた。この「遺構露出展示に関する調査研究」は、主として地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例の全国的な規模での把握と、遺構露出展示の企画・実施・管理等に関する基礎的な検討をおこなったものである。この成果を基に、今後、地方公共団体の担当者をはじめとする様々な関係者間において、遺構露出展示に関する情報共有と検討等が活発になるよう、さらに調査研究に取り組んでいる。

また、2011年度から開催している「遺跡等マネジメント研究集会」においては、その第２回として、『パブリックな存在としての遺跡・遺産』をテーマに、そもそも「遺跡等整備」の分野が対象としている遺跡や遺産とは、さまざまな社会やステークホルダーにとって、いったいどのような存在なのかについて、国内外の研究者による講演・討論等を通じて検討をおこなった。

もう１つの柱である「庭園」については、日本庭園の歴史および保護に関する調査研究をおこなっている。

2011年度からは、中世庭園を主題として、「庭園の歴史に関する研究会」の開催を中心に調査研究に取り組んでいる。2012年度は、『禅宗寺院と庭園』をテーマに、庭園史学・造園学の研究者のほか、国文学、美術史学、建築史学等の専門家が参加し、研究発表と討論を通じて、さまざま角度から検討した。

その他、コロンビア大学との研究交流を実施した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの４つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって、埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づいて、専門的な助言や協力を行っている。平成24年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財にかんする基礎的・体系的な調査・研究並びに調査手法の研究・開発を推進するため、１）出土遺

物等の材質構造調査、埋蔵環境調査並びに保存処理の開発研究、２）遺構の安定化法にかんする基礎研究、および３）文化財の非破壊材質構造調査法としてのミリ波およびテラヘルツ波の応用研究を実施している。

１）では、①ガラス及び鉱物の標準試料並びに遺物のスペクトルの集積、②Ｘ線ＣＴ法による金属製品の構造並びに腐食状態の調査、③木造建造物の彩色調査、④鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験による腐食のメカニズムの解明に取り組んだ。２）では、土質遺構の露出展示を実施予定の宮畑遺跡を調査フィールドとして、遺構の保護施設（覆屋）内の室空気及び遺構土壌における熱水分同時移動解析を行い、遺構土壌の適切な含水状態の維持及び塩類析出を抑制するための換気条件について検討した。また、３）では、テラヘルツ波イメージングにより、掛軸内部の構造にかんする非破壊調査をおこなうとともに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ波分光スペクトルの収集とサブミリ波イメージングによる調査をおこなった。また、古代の繊維製品の調査、研究並びに保存の問題を検討するため、「古代の繊維―古代繊織技術研究の最近の動向―」をテーマとした研究集会を開催した。

受託事業として、史跡ガランドヤ古墳１号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究（日田市）、大阪府安満宮山古墳出土品保存修理事業（文化庁）、史跡大分元町石仏における劣化部分養生和紙への塩類の移動に関する研究（大分市）、国史跡田熊石畑遺跡墓域整備にともなう環境調査業務委託（宗像市）、被災文化財（水損資料）応急処置業務（宮城県）、陸前高田市立博物館所蔵骨角器抜本修復業務（陸前高田市）、被爆十字架の保存修理（流川教会）の７件を実施した。連携研究としては、クスノキ製臼保存処理に関する保存科学的研究（大分市）、潤地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（糸島市）、松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）の３件を実施した。また、東京国立博物館との機構内業務協力事業により、陳列品（TC-515）修理にともなう事前調査をおこなった。

国宝高松塚古墳壁画の保存修復（文化庁委託）において、壁画および漆喰の劣化原因の追究と保存修復に資するデータの集積を目的とした材料分析調査をおこなった。また、石室石材をより安全に静置するための安定化支持具を製作し、取り付けをおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度の発掘指導および研究としては、新潟県の町上遺跡（縄文）、富山県の小竹貝塚（縄文）、京都府の山崎津跡（中世）、大阪府の難波宮跡（近世）、長崎県のカラカミ遺跡（弥生）、大分県の中世大友府内跡（中世）等から出土した動物遺存体の分析を実施し、報告書を執筆した。また、藤原宮朝堂院朝庭や藤原京右京六条二・三坊における古環境復元をおこなった。

町上遺跡では、縄文時代中期末～後期前葉の土坑やピットから出土した100,000点以上の焼骨片を分析し、サケ科魚類を集中的に漁獲していたことを指摘した。中世大友府内跡では、30,000点以上の動物遺存体の同定をおこなうとともに、安定同位体分析によってイノシシ属の食性分析を実施した。多種多様な魚貝類を消費するだけでなく、宣教師のフロイスやロドリゲスが記載したように、ブタ、ウシ、ウマ、ニワトリといった様々な家畜や家禽、ニホンジカ等の野生哺乳類を食用としていたことをあきらかにした。

また、藤原京右京六条二・三坊では、古代の池跡が検出されたため、橿原市教育委員会と連携研究を実施して、花粉、珪藻、種実、プラント・オパール、昆虫等の自然科学分析をおこない、古環境を復元した。

研究成果の発信として、日本考古学協会、日本文化財科学会、日本人類学会、動物考古学研究集会等で発表をおこなった。社会還元や普及事業として、長野県立歴史館、愛知大学、奈良文化財研究所等で一般向けの講演をおこなった。継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、シュモクザメ、セキショクヤケイ、ウマ、水牛等の動物骨格標本を作製・収集した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では年輪年代法を用いて考古学・美術史学・建築史学・歴史学等諸分野の研究に資するべく木造文化財の調査・研究をおこなっている。対象は出土遺物、建造物、美術工芸品等多岐にわたり、これらの年代測定を中心とする年輪年代調査を実施するとともに、樹種同定調査や調査手法の研究開発にも取り組んでいる。

本年度は４府県下５遺跡の出土木製遺物、３県下５棟の木造建造物、５都県下８件の美術工芸品、４県下５件の現生木について年輪年代調査を実施した。

考古学関連では奈良・藤原京左京六条三坊遺跡より出土した柱根12点の年輪年代調査をおこない、２点の柱根の測定値が暦年標準パターンとの照合に成功し、最外層の年輪年代はそれぞれ576年、660年であっ

た。いずれも樹皮が残存しているため、この年輪年代は材が伐採された年である。

美術史関連では解体修理中の仏像等の年輪年代調査をおこなったほか、マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いた木造神像彫刻や木彫仏像の非破壊年輪年代調査の成果を『埋蔵文化財ニュース』150号として刊行した。本誌は昨年度刊行した同147号の続編で、今回は７件８躯の木彫像を対象とした。今後も調査事例を蓄積するとともに、成果を公表したい。

文化遺産部歴史研究室、都城発掘調査部遺構研究室等と共同で取り組んだ奈良・内山永久寺旧蔵と伝わる木造扁額の調査では、額縁部の最外層で1219年の年輪年代を得た。調査部位には辺材が残存するとみられ、所用材の伐採年代は1249年前後と推定されることから、この扁額が宝治元年（1247）頃の同寺真言堂における修理にかかわるものである可能性が高まった。本調査により、真言堂の修理の実相の一端をあきらかにするとともに、これまで様式や型式分類によっていた扁額の編年に一つの定点を与えることができた。

また、昨年度に出力の向上と高解像度化のためデバイスを交換したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を活用し奈良・牽午子塚古墳出土夾苧棺材を調査した結果、乾漆の層構造を非破壊で観察することができた。さらに、同装置を用いて非破壊で樹種同定調査をおこなうための予備的な実験を開始している。同装置については今後も多方面でのさらなる活用を図りたい。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年４月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

2012年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の寺院と官衙関連遺跡および井戸遺構の資料を収集・整理するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、おもな遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、都城発掘調査部と共同で古代官衙・集落研究集会の資料「塩の生産・流通と官衙・集落」を作成した。このほか、文化庁の委託を受けて、『発掘調査のてびき』三部作の最終編にあたる各種遺跡調査編を編集・刊行した。

いっぽう、文化財の調査技術の領域では、計測・測量、探査の各分野を中心に活動をおこなった。計測・測量分野では、東日本大震災復興関連調査の支援のため、岩手県と奈良県周辺で実際の状況に応じた各種試験を実施し、それぞれの有効性について検討したほか、現地でワークショップを開催した。また、緊急の記録が必要となった西大寺（奈良県）、城の山古墳（新潟県）等で地上型三次元レーザースキャナーによる計測を実施した。

探査分野では、各地の地方公共団体や大学と連携して、平城宮東方官衙、東大寺（以上、奈良県）、砂原陣屋（北海道）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上、群馬県）、金沢城（石川県）、牟田洞窯（岐阜県）、備前国分寺（岡山県）、周防国府（山口県）等で各種手法の実践と改良をおこなった。海外では、東京文化財研究所に協力して、中央アジア各国の研究者を対象とした文化財探査ワークショップをカザフスタンで開催した。

国際学術交流

奈文研では、中国、韓国、カンボジアの３カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業を進めるいっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも協力している。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

年間を通じて次期５カ年の共同研究にむけて、中国社会科学院考古研究所と連絡し、中国国家文物局に共同調査の許可申請手続きを継続したが、年度内には許可が下りなかったため、新規共同調査を開始することができなかった。来年度以降も引き続き、許可申請を継続することとした。

2012年度後半には昨年度に共同調査を終了した洛陽宮城の遺物整理作業と遺物調査を計画したが、先方の整理作業が進まず実施が先送りになった。

年度後半には日中間に外交上の問題が生じ、中国出張を控えるような状況であったため、11月には中国都城との比較研究として、ベトナムタンロン皇城遺跡の視察、および唐宋期以降の陶磁器、瓦磚類を中心と

した遺物の調査を実施した。

年度末には、洛陽工作站において遺物整理状況の視察と来年度以降の遺物整理方法について打合せをおこない、さらに中国側が現在発掘調査している太極殿遺跡の視察をおこなった。鄴城遺跡においては出土遺物および現在発掘調査している遺跡の視察をおこない、来年度以降の共同調査にむけて打合せを実施した。

国内では、次期共同調査に係わる衛星写真のオルソ化作業を実施した。また、2001年から2005年まで実施した唐大明宮太液池についての中国文の概報や論文を翻訳し、成果報告所作成の準備をおこなった。関連書籍や資料を購入した。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

2012年度の遼寧省文物考古研究所との共同研究は、５カ年計画で開始した「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の２年目である。

研究活動は、６月25日から30日の６日間、研究員３名を派遣して瀋陽市の遼寧省文物考古研究所と遼寧省博物館、朝陽市の北塔博物館、朝陽市博物館、朝陽県博物館において、関連する出土品や石造物の調査・撮影を実施した。さらに、朝陽市近郊の木匠営子村において、４世紀の後燕代に築かれた竜騰苑の跡と目される、東団山子・西団山子の両遺跡を踏査して、崖面に露出する版築断面の状況や土器片等の地表面散布状況を確認した。

また、遼寧省文物考古研究所において、2012度の詳細な共同研究事業計画について協議し、調査日程等の調整をおこなった。他に、遼寧省側から提案のあった遼代仏教文化展にかんして、展示品等についての協議もおこなった。

年度末の３月17日から20日には、研究員４名を派遣し、朝陽市建平県の牛河梁遺跡を視察し、露出展示遺構の遺存状況や出土彩文土器・塑像・壁画等の遺存状態を確認した。その上で、保存方策等について協議をおこなった。また、遼寧省文物考古研究所において、次年度の詳細な活動計画と調査日程等について協議した。

この他に、2006年度から2010年度の共同研究「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」の成果報告書として、『朝陽地区隋唐墓の整理と研究』の編集を進め、年度末に刊行した。

●中国河南省文物考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究所は、2010年３月16日締結の『友好共同研究議定書』第４条と『友好共同研究覚書（修訂）』の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の発掘出土品の整理、調査研究を共同で継続して実施してきた。

2012年度は共同研究第Ⅲ期５ヵ年計画の３年目にあたる。引き続き2002年から2004年にかけて発掘調査した鞏義市黄冶窯跡出土資料の整理と、2005年から2007年にかけての鞏義市白河窯跡出土資料の整理をすすめた。あわせて、中国および日本における唐三彩関連資料の調査を継続的におこなった。

2012年８月には、河南省文物考古研究所が60周年を迎えるのに際し、記念式典とシンポジウムに、奈良文化財研究所から松村恵司所長をはじめ、巽淳一郎（京都橘大学教授・奈文研客員研究員）、杉山洋（都城発掘調査部副部長）、玉田芳英（都城発掘調査部考古第二研究室長）、丹羽崇史（飛鳥資料館学芸室研究員）の５名を派遣するとともに、唐三彩関連資料の追加調査をおこなった。また、今後の共同研究の方針と進め方についても、詳細な協議をおこなった。

下半期は諸事情により、研究員の派遣と招聘が困難な状況となり、やむなく見合わせることとした。2013年３月には、アメリカ合衆国ロイヤルアジアンアート美術館、メトロポリタン美術館、カナダのロイヤル・オンタリオ美術館に保管されている唐三彩の資料調査に、難波洋三（企画調整部長）、玉田芳英、森川実（都城発掘調査部主任研究員）、青木敬（都城発掘調査部研究員）の４名を派遣し、北米の美術館が所蔵する唐三彩資料の収集をおこなった。

また、河南省文物考古研究所と中国文化遺産研究院が、『華夏考古』2011年第１期において発表した白河窯跡の発掘調査概報の日本語版を刊行する準備を進め、『河南鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』を奈文研研究報告第11冊として2013年３月に予定通り刊行した。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

当研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協約書を締結し、共同研究を実施してきた。2012年度はその第３期の２年目にあたり、協約にもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程にかんする共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題に基づき、６回の派遣と４回の受け入れを実施した。研究成果は５カ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流では当研究所より国立慶州文化財研究所へ研究員１名を派遣し、新羅王京遺跡等において共

同発掘調査を実施した。派遣期間は約２カ月であった。また当研究所において国立慶州文化財研究所から研究員１名を受け入れ、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）において共同調査を実施した。受け入れ期間は約２カ月であった。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクおよび周辺諸国を対象として文化遺産保存修復協力にかかわる事業を東京文化財研究所と共同で実施しているが、2012年度は、現地調査や現地からの研修生受け入れは実施しなかった。ただ、12月にドイツのアーヘンで開催されたユネスコ日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保護専門家会議に参加した。この会議では現地に博物館を建設する計画についても話し合われた。

アフガニスタン、イラクについては、文化財保護の観点からも現地の治安状況の改善が切に望まれる。

●中央アジアにおける研究協力

中央アジア５カ国（カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン）と中国が共同でシルクロードの世界遺産登録を目指して作業を進めている。日本はユネスコ日本信託基金を用いて中央アジア諸国に対し「シルクロード世界遺産推薦ドキュメンテーション支援」をおこなっている。奈文研も東京文化財研究所に協力し、カザフスタンにおいて昨年度に引き続き９月20日から24日に、遺跡探査のワークショップをボロルダイ古墳群を対象として実施した。

キルギスでは東京文化財研究所がおこなっている拠点交流事業に協力し、９月１日から17日の考古遺跡発掘調査と遺物の研修保存ワークショップに加わり、発掘調査指導と座学をおこなった。

●西トップ遺跡の保存と修復

2012年３月に現地において修復の開始式典をおこない、本遺跡に対する修復活動が正式にスタートした。本年度は南祠堂の解体仮組を目指し、式典終了後の３月からまず解体作業に着手した。躯体部から開始した解体作業は順調に進行し、３月中に上成基壇の解体をほぼ終了した。その後、上成基壇最下層N18石組みを外し、所定の解体作業を終了した。作業に際しては、躯体部は平面図と立面図、基壇部は各石組みの平面図を取りながら進行した。

解体作業が終了した５月からは、躯体部、上成基壇、N18石組の３パーツに分けて仮組をおこなった。仮組をほぼ同時に、下成基壇の調査に着手し、下成基壇内の基壇土を除去し、基壇築成状況の確認をおこなった。その結果、基壇外装石材の内側控積を、基壇内から砂岩チップと黒色粘質土を交える土層で支えた後、全体に淡赤褐色祖砂を充填することにより下成基壇を構築していることがあきらかになった。基壇土内からは青銅製鈴２点、陶磁器の小破片が出土した。この基壇土除去作業によって、中央祠堂下成基壇南階段の存在があきらかになり、３Ｄ測量をはじめとする記録作業をおこなった。この成果により、西トップ遺跡の構築がまず中央祠堂を先にする物であることが確定した。

今後、仮組を続け、各部材の収まりや、新材への置換のめどが立った2013年度早々からは、下成基壇の解体再構築を開始し、当該年度中の南祠堂修復完成を目指す。

●コロンビア大学との研究交流

2011年３月９日付けで、アメリカ合衆国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所（バーバラ・ルーシュ所長）および建築・計画・保存大学院（マーク・ウィグリー大学院長）と交わした研究協力および交流に関する覚書にもとづき、2011年４月１日から2016年３月31日までの５年間にわたり、①研究者の交流、②文化遺産の調査・研究、保存修復に関する学術活動の共同実施、シンポジウム等の共同開催、③三者が関心を有する文化遺産の調査・研究、保存修復に関する情報の共有、学術資料の交換をおこなうものである。今年度は、2012年９月25日にコロンビア大学において講演会を共催し、平澤毅遺跡整備研究室長が “Protection of ‘Places of Scenic Beauty’（Meisyoh/名勝）in JAPAN”（「日本における名勝の保護」）、脇谷草一郎保存修復研究室研究員が “Study on Heat and Moisture Movement in Openly Exhibited Soil Structural Remains”（「露出展示された土質遺構における熱・水分移動に関する研究」）の２つの講演をおこなった。

研究打ち合わせおよび調査のため／科研費
●松井　章：ベトナム社会主義共和国／12.6.18～6.23／基盤研究Aによる少数民族調査／運営費交付金／科研費
●田代　亜紀子：ロシア連邦／12.6.22～7.7／第36回　世界遺産委員会出席／運営費交付金
●青木　達司：ロシア連邦／12.6.22～7.9／第36回　世界遺産委員会出席／運営費交付金
●松井　章：カンボジア王国／12.6.23～6.24／西トップ遺跡修復事業視察／運営費交付金／科研費
●井上　直夫：中華人民共和国／12.6.24～6.29／飛鳥資料館秋期特別展60周年記念展借用遺物撮影のため／運営費交付金
●成田　聖：中華人民共和国／12.6.24～6.29／飛鳥資料館秋期特別展60周年記念展借用遺物撮影および状態確認／運営費交付金
●諫早　直人：中華人民共和国／12.6.24～6.29／飛鳥資料館秋期特別展60周年記念展借用遺物撮影および状態確認／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／12.6.25～6.30／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／12.6.25～6.30／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●小池　伸彦：中華人民共和国／12.6.25～6.30／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●石村　智：ミクロネシア連邦／12.6.30～7.6／ミクロネシア連邦ポンペイ州における戦争遺跡の調査／科研費
●加藤　真二：ロシア連邦／12.7.4～7.15／アジア旧石器協会シンポジウムへの出席、研究発表／科研費
●小野　健吉：イタリア共和国／12.7.5～7.16／イタリア庭園の立地・構成・意匠に関する現地調査／京都大学
●中島　咲紀：中華人民共和国／12.7.6～7.13／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●鈴木　智大：中華人民共和国／12.7.6～7.13／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●高橋　知奈津：中華人民共和国／12.7.6～7.13／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●深澤　芳樹：大韓民国／12.7.14～7.17／大韓民国高麗大学所蔵寛倉里遺跡出土土器の調査／奈良女子大学経費
●諫早　直人：大韓民国／12.7.14～7.21／松下幸之助記念財団研究助成「古墳・三国時代の金工品生産と身分表象」に関わる調査・研究のため／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／12.7.14～7.22／カンボジア西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●海野　聡：大韓民国／12.7.16～7.21／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●高橋　知奈津：大韓民国／12.7.16～7.21／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●小田　裕樹：中華人民共和国／12.7.16～7.23／隋唐長安城周辺の墳墓関連遺跡の踏査・資料見学／科研費
●箱崎　和久：大韓民国／12.7.17～7.21／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／12.7.19～7.28／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示遺物の写真撮影・事前資料調査／運営費交付金
●井上　直夫：中華人民共和国／12.7.19～7.28／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示遺物の写真撮影・事前資料調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／12.7.19～7.28／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示遺物の写真撮影・事前資料調査／運営費交付金
●木村　理恵：中華人民共和国／12.7.19～7.28／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示遺物の写真撮影・事前資料調査／運営費交付金
●井上　幸：中華人民共和国／12.7.21～7.27／第六届中国文字学会国際学術検討会に出席／科研費
●松井　章：アメリカ合衆国／12.7.28～8.7／北米北西海岸先住民の動物利用文化の調査／京大経費
●杉山　洋：中華人民共和国／12.8.6～8.9／河南省文物考古研究所60周年記念式典への参加／運営費交付金・先方負担
●脇谷　草一郎：ベトナム社会主義共和国／12.8.6～8.9／タンロン皇城遺跡保存に係る現地調査に参加／東文研
●丹羽　崇史：中華人民共和国／12.8.6～8.11／河南省文物考古研究所60周年記念式典への参加／運営費交付金
●松村　恵司：中華人民共和国／12.8.6～8.11／河南省文物考古研究所60周年記念式典への参加／運営費交付金
●玉田　芳英：中華人民共和国／12.8.6～8.11／河南省文物考古研究所60周年記念式典への参加／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／12.8.10～8.17／ウドン・ロンヴェック遺跡における拠点交流事業／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／12.8.11～8.20／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業調査／運営費交付金
●田代　亜紀子：カンボジア王国／12.8.12～8.20／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業調査／運営費交付金
●石田　由紀子：大韓民国／12.8.15～8.21／第一次大極殿院復元に関する瓦磚の類例調査／運営費交付金
●中川　二美：大韓民国／12.8.15～8.21／第一次大極殿院復元に関する瓦磚の類例調査／運営費交付金
●小澤　毅：大韓民国／12.8.15～8.21／第一次大極殿院復元に関する瓦磚の類例調査／運営費交付金
●清野　孝之：大韓民国／12.8.15～8.21／第一次大極殿院復元に関する瓦磚の類例調査／運営費交付金
●小田　裕樹：大韓民国／12.8.16～8.24／日韓共同研究に基づく扶余地域出土土器の調査／運営費交付金
●松井　章：ベトナム社会主義共和国／12.8.17～8.23／少数民族の民族考古学調査／科研費
●加藤　真二：中華人民共和国／12.8.18～9.1／科研費による河北省文物研究所所蔵石器群の調査／科研費
●鈴木　智大：中華人民共和国／12.8.19～8.26／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●海野　聡：中華人民共和国／12.8.19～8.26／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●箱崎　和久：中華人民共和国／12.8.19～8.26／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●中島　咲紀：中華人民共和国／12.8.19～8.26／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／12.8.30～9.3／International Forum on Ancient Bronze Smelting and Casting Industries in East Asia への参加・発表／科研費
●石村　智：ミクロネシア連邦／12.9.2～9.7／ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡保護に資する能力強化ワークショップ、ミクロネシア水中文化遺産の調査／国際交流基金・科研費
●高妻　洋成：イタリア共和国／12.9.2～9.8／平成24年度日伊文化財協力事業に係るワークショップ／文化庁
●田代　亜紀子：インドネシア共和国／12.9.2～9.14／科研「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」調査／科研費

●森先　一貴：大韓民国／12.9.3～11.2／国立慶州文化財研究所との発掘調査交流への参加／運営費交付金・先方負担
●森本　晋：キルギス共和国・カザフスタン共和国／12.9.4～9.26／キルギスでの拠点交流事業、カザフスタンでの探査ワークショップに出席／東文研
●馬場　基：スエーデン王国／12.9.5～9.11／木簡調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／12.9.7～9.8／西トップ遺跡の調査研究　／東文研
●箱崎　和久：ベトナム社会主義共和国／12.9.7～9.13／ベトナム国ティエンザン省カイベーの集落調査およびドンナイ省フーホイ村、クアンナム省オイアン集落整備活用状況の視察／昭和女子大学
●林　良彦：ベトナム社会主義共和国／12.9.7～9.13／ベトナム国ティエンザン省カイベーの集落調査およびドンナイ省フーホイ村、クアンナム省オイアン集落整備活用状況の視察／昭和女子大学
●佐藤　由似：ベトナム社会主義共和国／12.9.9～9.13／タンロン皇城遺跡保存協力事業ワークショップ／東文研
●石村　智：ベトナム社会主義共和国／12.9.9～9.13／タンロン皇城遺跡保存支援国際協力／東文研
●清野　孝之：ベトナム社会主義共和国／12.9.9～9.13／タンロン考古ワークショップ／ユネスコ
●杉山　洋：ベトナム社会主義共和国／12.9.9～9.13／タンロン皇城の調査と保存／東文研
●諫早　直人：大韓民国／12.9.9～9.15／日韓共同研究「日本列島における金工品生産と新羅」に基づく調査研究／運営費交付金
●佐藤　由似：アイルランド共和国／12.9.15～9.24／第14回東南アジア考古学ヨーロッパ学会国際会議における報告／運営費交付金
●大林　潤：大韓民国／12.9.18～9.21／国際シンポジウム『古代庭園と寺利』発表参加／先方負担
●金田　明大：カザフスタン共和国／12.9.18～9.26／UNESCO国際ワークショップ講師／先方負担
●脇谷　草一郎：アメリカ合衆国／12.9.22～9.28／アメリカ合衆国コロンビア大学との共同研究・研究交流／運営費交付金
●青木　達司：アメリカ合衆国／12.9.22～9.29／アメリカ合衆国コロンビア大学との共同研究・研究交流／運営費交付金
●平澤　毅：アメリカ合衆国／12.9.22～9.29／アメリカ合衆国コロンビア大学との共同研究・研究交流／運営費交付金
●佐藤　由似：カンボジア王国／12.10.2～11.8／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●成田　聖：大韓民国／12.10.8～10.13／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示品の借用／運営費交付金
●諫早　直人：大韓民国／12.10.8～10.13／平成24年度飛鳥資料館秋期特別展の展示品の借用／運営費交付金
●松井　章：ロシア連邦／12.10.23～10.27／ロシアのイヌ、オオカミの頭骨の形態的計測／科研費
●児島　大輔：中華人民共和国／12.10.23～10.31／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●海野　聡：中華人民共和国／12.10.23～10.31／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●中島　咲紀：中華人民共和国／12.10.23～10.31／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●庄田　慎矢：中華人民共和国／12.10.23～10.31／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●黒坂　貴裕：中華人民共和国／12.10.23～12.31／第一次大極殿院の類例調査／運営費交付金
●鈴木　智大：中華人民共和国／12.11.1～11.4／中国遼寧省の古建築の建築史的調査および資料収集／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／12.11.3～11.5／西トップ遺跡の調査研究　／運営交付金
●箱崎　和久：大韓民国／12.11.6～11.10／韓国国立文化財研究所主催、韓中日建築文化遺産保存国際学術会議への出席／運営費交付金・先方負担
●林　良彦：大韓民国／12.11.6～11.10／韓国国立文化財研究所主催、韓中日建築文化遺産保存国際学術会議への出席／運営費交付金・先方負担
●黒坂　貴裕：大韓民国／12.11.7～11.10／韓国国立文化財研究所主催、韓中日建築文化遺産保存国際学術会議への出席／運営費交付金・先方負担
●鈴木　智大：中華人民共和国／12.11.7～11.12／中国大工道具の調査／先方負担
●青木　敬：ベトナム社会主義共和国／12.11.7～11.13／東アジア都城の比較研究のための調査／運営費交付金
●今井　晃樹：ベトナム社会主義共和国／12.11.7～11.13／東アジア都城の比較研究のための調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：ベトナム社会主義共和国／12.11.7～11.13／東アジア都城の比較研究のための調査／運営費交付金
●庄田　慎矢：大韓民国／12.11.15～11.18／韓国学中央研究院韓国文化深層研究共同研究課題「青銅器・鉄器時代東北亜諸地域における複合社会の形成」と関連した研究打ち合わせ・日韓共同研究「古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」と関連した調査／先方負担・運営費交付金
●石橋　茂登：大韓民国／12.11.17～11.18／日韓共同研究「古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」に係る資料調査／運営交付金
●丹羽　崇史：アメリカ合衆国／12.11.17～11.28／アメリカ合衆国東部における博物館・大学機関所蔵中国青銅器・失蠟法関連資料の調査／科研費
●佐藤　由似：カンボジア王国／12.11.19～1.2／アンコール文化遺産保護に関する研究協力、文化庁委託業務「カンボジア・ウドン遺跡およびロングヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」／運営交付金
●降幡　順子：大韓民国／12.11.22～11.25／「三国時代の国家の成長と物質文化」関連国際学術会議への出席／先方負担・科研費
●田代　亜紀子：イギリス／12.11.25～11.29／科研「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」調査／科研費
●松井　章：タイ王国／12.11.26～11.30／アジア・大洋州畜産会議（AAP）出席／科研費
●石村　智：カンボジア王国／12.11.28～12.8／カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業／運営交付金
●庄田　慎矢：大韓民国／12.11.29～11.30／慶州文化財研究所開催「慶州月城の保存整備政策研究学術大会」における研究発表と討議／先方負担
●田代　亜紀子：オランダ／12.11.29～12.9／科研「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」調査／科研費
●庄田　慎矢：モンゴル国　／12.12.1～12.5／基盤研究B『韓国出土古人骨の自然人類学的総合アプローチ』にかかるモンゴル国立大学における資料調査および研究打ち合わせ／科研費
●森本　晋：カンボジア王国／12.12.3～12.13／アンコール国際調査委員会出席／運営費交付金
●森本　晋：ドイツ連邦共和国／12.12.3～12.13／バーミヤン専門家会議出席／運営費交付金
●小澤　毅：台湾／12.12.8～12.10／中国出土文物に関する資料調査／京大経費

●松井　章：台湾／12.12.8～12.10／中央研究院歴史語言研究所訪問・研究打ち合わせ／京大経費
●田代　亜紀子：ドイツ連邦共和国／12.12.9～12.14／科研「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」調査／科研費
●渡邉　晃宏：大韓民国／12.12.10～12.13／大韓民国国立文化財研究所との共同研究による木簡などの調査／運営交付金・先方負担
●桑田　訓也：大韓民国／12.12.10～12.13／大韓民国国立文化財研究所との共同研究による木簡などの調査／運営交付金・先方負担
●成田　聖：大韓民国／12.12.10～12.14／飛鳥資料館秋期特別展60周年記念展借用物返却／運営費交付金
●庄田　慎矢：大韓民国／12.12.10～12.14／大韓民国国立文化財研究所、国立扶余博物館、国立慶州博物館、国立慶州文化財研究所において、飛鳥資料館秋期特別展に関わる借用遺物の返却／運営交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／12.12.10～12.19／カンボジア・西トップ遺跡の調査研究／運営交付金
●森先　一貴：ロシア連邦／12.12.17～12.22／サハリン州立大学における新石器時代石器・土器の調査及び年代測定資料サンプリング／高梨学術奨励基金
●若杉　智宏：大韓民国／12.12.18～12.21／日韓共同研究に係る資料調査及び遺跡見学／運営交付金
●廣瀬　覚：大韓民国／12.12.18～12.21／日韓共同研究に係る資料調査及び遺跡見学／運営交付金
●青木　敬：大韓民国／12.12.18～12.21／日韓共同研究に係る資料調査及び遺跡見学／運営交付金
●井上　幸：中華人民共和国／12.12.22～12.24／資料収集／科研費
●田代　亜紀子：タイ王国／13.1.4～1.8／科研「ヘリテージツーリズムによる地域の文化遺産マネジメントに関する研究」調査復興に関する総合的研究」調査／科研費
●田代　亜紀子：カンボジア王国／13.1.8～1.14／科研「ヘリテージツーリズムによる地域の文化遺産マネジメントに関する研究」調査／科研費
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.1.8～1.28／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.1.10～1.15／西トップ遺跡の調査研究／科研費
●庄田　慎矢：ヨルダン国・ハシミテ王国／13.1.10～1.20／第7回世界考古学会議での研究発表及び討議のため／科研費
●清野　孝之：ヨルダン国／13.1.10～1.21／第7回世界考古学会議への出席／運営交付金
●大林　潤：カンボジア王国／13.1.11～1.5／西トップ遺跡修復事業　建造物調査／運営交付金
●林　良彦：カンボジア王国／13.1.11～1.5／西トップ遺跡修復事業　建造物調査／運営交付金
●石村　智：ヨルダン国／13.1.11～1.20／第7回世界考古学会議への出席／科研費
●加藤　真二：フランス共和国／13.1.20～1.27／科学研究費による中国細石刃文化の基礎的研究のための調査／科研費
●田代　亜紀子：ベトナム社会主義共和国／13.1.20～1.23／京都大学生存圏ミッション研究協議及び講義／先方負担（京都大学）
●高妻　洋成：ベトナム社会主義共和国／13.1.20～1.23／京都大学生存圏ミッション研究協議及び講義／先方負担（京都大学）
●森先　一貴：ロシア連邦／13.1.21～1.28／ロシア極東ザリフニィムィス遺跡の資料調査／科研費
●田村　朋美：カンボジア王国／13.1.22～1.29／拠点交流事業講義・調査／運営交付金
●杉山　洋：ベトナム社会主義共和国／13.1.22～1.24／タンロン遺跡における考古学ワークショップの開催／東文研
●石村　智：ベトナム社会主義共和国／13.1.22～1.25／ユネスコ日本信託基金によるベトナム・タンロン皇城遺跡保存にかかるワークショップ／東文研
●脇谷　草一郎：カンボジア王国／13.1.22～1.26／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営交付金
●井上　直夫：カンボジア王国／13.1.22～1.26／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営交付金
●清野　孝之：ベトナム社会主義共和国／13.1.22～1.27／ユネスコ日本信託基金によるベトナム・タンロン皇城遺跡保存にかかるワークショップ／東文研
●杉山　洋：カンボジア王国／13.1.25～1.30／ウドン・ロンヴェック遺跡の調査研究／運営交付金
●降幡　順子：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.1／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●高妻　洋成：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.1／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●小野　健吉：スリランカ民主社会主義共和国／13.1.26～2.2／スリランカの庭園遺跡・文化遺産の現地調査／運営交付金
●難波　洋三：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.3／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●庄田　慎矢：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.3／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●青木　敬：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.3／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●森本　晋：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.3／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●石村　智：ミャンマー連邦共和国／13.1.26～2.3／受託　平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査」／受託
●佐藤　由似：インド共和国／13.1.29～2.3／現地ワークショップと関連調査／運営交付金
●田代　亜紀子：インド共和国／13.1.29～2.4／海のシルクロードに関する観光研究調査／運営交付金
●田村　朋美：インド共和国／13.1.29～2.4／拠点交流事業講義・調査／運営交付金
●箱崎　和久：大韓民国／13.1.31～2.2／東国大学主催シンポジウム：東アジア三大古代都市仏教文化「仏教と建築」への出席／先方負担
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.2.4～3.16／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.2.8～2.16／西トップ遺跡の調査修復／助成金
●石村　智：ミクロネシア連邦／13.2.10～2.18／ナン・マドール遺跡のドキュメンテーション作成にかかる水中地形調査／東文研
●加藤　真二：中華人民共和国／13.2.20～2.26／科学研究費による中国細石刃文化の基礎的研究のための調査／科研費
●庄田　慎矢：大韓民国／13.2.21～2.26／

日韓共同研究「三国時代の木器に関する総合的研究」に関する調査および研究打ち合わせ／運営交付金
●石橋　茂登：大韓民国／13.2.23～2.24／日韓共同研究「三国時代の木器に関する総合的研究」に関する調査および研究打ち合わせ／運営交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.2.24～2.27／クメール帝国の空間構造と地方拠点都市に関する研究／科研費
●加藤　真二：香港／13.2.27～3.2／科学研究費による中国細石刃文化の基礎的研究のための調査／科研費
●石村　智：台湾・パラオ共和国／13.2.27～3.7／台湾・パラオにおける日本統治時代遺構の調査／科研費
●今井　晃樹：中華人民共和国／13.3.11～3.15／中国社会科学院考古研究所との共同調査についての打ち合わせ及び発掘調査智の現地視察／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.3.11～3.17／クメール帝国の空間構造と地方拠点都市に関する研究／科研費
●松井　章：中華人民共和国／13.3.15～3.22／出土動物遺存体の調査／科研費
●小野　健吉：イタリア共和国／13.3.16～3.24／イタリアの文化遺産及び庭園の立地・構成・意匠に関する現地調査／京都大学
●小池　伸彦：中華人民共和国／13.3.17～3.20／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25年度共同研究計画の協議、土製品・石材等保存方法の検討）／運営費交付金
●清野　孝之：中華人民共和国／13.3.17～3.20／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25年度共同研究計画の協議、土製品・石材等保存方法の検討）／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／13.3.17～3.20／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25年度共同研究計画の協議、土製品・石材等保存方法の検討）／運営費交付金
●高妻　洋成：中華人民共和国／13.3.17～3.20／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25年度共同研究計画の協議、土製品・石材等保存方法の検討）／運営費交付金
●降幡　順子：ロシア連邦／13.3.17～3.21／渤海地域出土三彩陶器の実見および分析試料サンプリング／運営費交付金
●庄田　慎矢：ロシア連邦／13.3.17～3.21／渤海地域出土三彩陶器の実見および分析試料サンプリング／運営費交付金
●難波　洋三：アメリカ合衆国・カナダ／13.3.18～3.26／アメリカ・カナダにおける唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金
●青木　敬：アメリカ合衆国・カナダ／13.3.18～3.26／アメリカ・カナダにおける唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金
●森川　実：アメリカ合衆国・カナダ／13.3.18～3.26／アメリカ・カナダにおける唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金
●玉田　芳英：アメリカ合衆国・カナダ／13.3.18～3.26／アメリカ・カナダにおける唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.3.25～3.29／西トップ遺跡の調査研究／助成金

公開講演会

特別講演会（東京会場）

2012年10月6日

◆高妻　洋成：文化遺産を守り伝える科学技術―伝統の技と科学の力―

文化遺産を守り伝えるのに、さまざまな伝統技術と科学技術が応用されてきていることを具体的な事例をあげながら紹介した。「もの（文化財）」は時間とともに徐々に劣化していく運命にあり、文化財の保存修復はその劣化の速度を極力遅くしていく作業にほかならない。何よりも大切なことは、「目通し、風通し」による定期的な人間の目による状態の観察と伝統の技、そして科学技術をうまく融合させることであり、それによって文化遺産を将来に伝えていくことができるのである。

◆渡辺　丈彦：発掘が塗りかえる古代史―都城の発掘調査60年―

奈良文化財研究所は、これまで、わが国の古代国家揺籃の地である飛鳥地域と藤原宮・京、そして平城宮・京および南都七寺の調査を60年間にわたって継続的におこなってきた。その調査研究の特徴は、考古学、文献史学、建築史学、庭園史学、保存科学等さまざまな分野の研究者が共同して総合的調査研究をおこなう点にあり、古代史を復元するうえで数々の重要な成果をあげてきた。講演会では、平城宮東院地区、水落遺跡、山田寺跡、飛鳥池遺跡等、特に重要で驚くべき発見があった遺跡に絞って、その発掘調査の成果を紹介した。

◆吉川　聡：古寺社の古文書が語りだす歴史―南都の古文書調査から―

歴史研究室では研究所創立以来、古文書調査を実施している。主に南都の大寺社が所持する古文書を悉皆的に調査して、目録に仕上げていくという基礎的で地味な調査である。しかしそのような調査が、文化財を把握する基本になっている。

調査の中では、時に、今まで思いも寄らなかった過去の世界が見えてくることがある。例えば興福寺論義草の奥書には、文亀３年（1503）～永正元年（1504）の飢饉の様子が、詳細に記されていた。この資料からは、前近代の生活・社会、さらには政治・経済までもが、気象条件に大きく影響されていたことが読み取れる。資料に真摯に向き合い、その語る言葉に耳を傾け、後世に残していくのが、我々の努めと考えている。

◆金田　明大：掘らずに土の中をみる―遺跡探査の応用と成果―

発掘調査は代表的な遺跡の調査方法のひとつであるが、現状を改変すること、現実的に調査できる範囲に限界が多いことが問題点としてあげられる。今回は、発掘を補う方法として掘らずに遺跡の情報を得る探査について奈文研が培ってきた研究の成果を紹介した。手法の紹介に加え、平城宮における官衙遺構の配置の解明や東大寺東塔院の諸施設の把握、関東や九州等日本各地の多様な遺跡での具体的な成果を解説した。加えてカザフスタンやカンボジア等現地の研究者育成を兼ねた海外の事例を紹介し、その有効性と限界について説明をおこなった。

◆平澤　毅：遺跡を現在に活かし、未来に伝える―平城宮跡の保存と整備―

昭和40年代以降、日本全国各地で推進されて来た考古学的遺跡の保存と整備の嚆矢となったのは、特別史跡平城宮跡における取組であった。特に高度経済成長期以降、史跡名勝天然記念物や埋蔵文化財の保護が進展する中で、考古学的遺跡の内容と価値をどのように保護し、そして、その重要性をどのように表現するのか、平城宮跡は、その試行錯誤の場でもあった。１世紀にわたるその保存と整備の経過とともに、平城遷都1300年祭などを契機とした様々な取組には、「遺跡を保護し継承してゆく」文化が育まれてきた。

◆石村　智：海外の遺跡をまもる―国際協力としての文化遺産保護―

奈文研がカンボジア、アフガニスタン等

で実施している国際協力事業を紹介しながら、海外における文化遺産の保護は、「文化立国」としての日本が世界にはたしうる国際協力のひとつの形となりうる可能性を示した。またそうした事業をすすめるにあたって、奈文研が60年にわたって積み重ねてきた文化財の調査研究の成果という「地力」によるところが大きいことを指摘し、今後も「奈文研らしさ」を生かした国際協力を果たすことが大事であるとの意見を述べた。

日中韓国際講演会「古代都城文化の潮流」

2012年10月20日

◆小澤　毅：飛鳥から藤原京そして平城京へ

多年にわたる発掘調査で鮮明になってきた日本の古代都城の変遷を、相互の相違点と共通点の比較からあとづけた。飛鳥諸宮の防衛体制は、百済王京が直接の規範となった可能性が高い。一方、藤原京は、実在の都城ではなく、『周礼』等に記される中国都城の理想型を体現するかたちで建設されたとみられる。また、平城京は、藤原京の要素を受け継ぎつつも、唐の長安城の直接的な模倣のうえに成立した。おのおのの時点で直面した国際情勢には大差があり、希求された都城の形態や役割も異なるが、それは同時に、日本の国家体制が整備されていく階梯を示すものでもあった。

◆渡辺　晃宏：出土文字資料からみた平城京の役所と暮らし

木簡の発見は、平城宮跡のこれまでの発掘調査の中でも最大の成果といってよい。

木簡が文字資料・木製品・考古遺物という３つの顔をもつことを紹介したあと、木簡などの出土文字資料が発掘調査の中でどのような役割を果たしてきたかについて、式部省という役人の人事を担当する役所の解明過程をたどりながらあきらかにした。

また、日本の木簡研究に最大の画期をもたらした長屋王家木簡の発見とその意義を述べ、そこに読みとれる貴族の生活の一端を食を中心に紹介した。

◆黄　仁鎬：新羅王京の都市構造と発展過程

1000年近い新羅の歴史において常に首都であった慶州では、６世紀から体系的な都市開発を伴った王京整備がおこなわれた。王京の中心は王宮のあった月城であり、月城の整備、王京の整備、地方拠点都市の整備には相関がある。王京の整備は時期によって段階別に坊の大きさや形態が調整されている。基本の単位区画が変更されても、新旧の開発部分が問題なく接続できるように緩衝地帯を設けている。川を越えて都市が拡張された段階では、地形条件に合わせた効率的な都市開発をおこなっている。

日中韓国際講演会発表の様子

◆銭　国祥：漢魏洛陽城の北魏宮城中央南部の共同調査

漢魏洛陽城は、西周から後漢や北魏等累計600年間、都城として使用されており、1962年より調査がおこなわれてきた。2007から2011年度には、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との日中共同調査がおこなわれ、北魏宮城中央南部の閶闔門、２号門、３号門について、位置と規模、形態や構造が判明し、北魏宮城の西の境界があきらかになるとともに、層位の明確な遺物によって編年研究が進んだ。漢魏洛陽城は曹魏時代から単一の宮城を北側中央に置き、宮殿前に軸線に沿って大通りを置くという配置を採用しており、後世の主要な王朝の都城形態は日本の都城も含め影響を受けている。

日中韓国際講演会ディスカッションの様子

第110回公開講演会

2012年6月30日

◆松村恵司　特別講演：太安萬侶と硯

『古事記』編纂1300年を記念し、平城京左京四条四坊九坪出土の羊形硯が、太安萬侶の硯である可能性について検討した。墓誌に記されたように安萬侶は左京四条四坊に居住。そこから昭和57年に出土した羊形硯の復元の経緯を紹介し、その後に発見された羊形硯の類例を比較。平城宮・京出土硯の中に羊形硯を位置付けた。

羊は吉祥の祥に通じ、また、従順な霊獣として神聖視された動物である。十二支の一つであるが、我が国に生息しない想像上の動物であった。鳥形や亀形などの形象硯との比較の結果、羊形硯が文筆家太安万侶にふさわしい硯である可能性を指摘した。

◆鈴木　智大：古社寺修理技師たちの近代和風建築

明治初頭の廃仏棄釈の嵐がおさまるころ、歴史的建造物が文化財として認識され、修理技師たちの手により息を吹き返した。同時に彼らは作り手でもあった。その作品からは近代日本における「和風」に対する認識の変化を読みとれる。

修理工事が始まる以前、長野宇平治による奈良県庁舎（明治28年）は、「公共建築＝洋風」という構図をやぶり、「和風」意匠を用いた。修理工事が進むにつれて古建築の意匠は蓄積された。京都府技師の松室重光による武徳殿（明治32年）において「折衷」がおこなわれるように、関西を中心とする各地に古建築の断片を範とする建築が建てられた。さらには京都府技師の亀岡末吉による出石神社（大正３年）のようにみずから様式を「創造」するに至った。

◆高橋　知奈津：関西の風土と近代和風庭園

日本庭園は、近代の欧化の流れの中で一度は荒廃したが、西洋の「造園」の影響を受け、和洋折衷の道を模索、渓流や野など原寸大の自然を好む風景観に基づく「自然主義庭園」を成立させるに至った。近代庭園は、新しい風景観、技術、デザインの導入により、それまでの日本庭園の常識を大胆に克服したといえる。また、その隆盛の背景には、近代富豪層の財力、文化的教養、趣味・蒐集への傾倒があり、多様な自然景観や古寺などの名所に恵まれた関西地方では、これらの風景を庭園の背景に取り込むなど、風土に根差した個性豊かな庭園が造られた。

第111回公開講演会

2012年11月3日

◆松村恵司　特別講演：和同開珎は「カイホウ」か「カイチン」か

和同開珎の読みをめぐり、カイチン説とカイホウ説が江戸時代から対峙する。和同開珎が「和銅開寶」の偏や冠などを省画したものか、「開珍」であるのか、論争は未だに決着をみない。しかし後世の銭貨にみるように、銭文には国家統治の理想や、治世を称える吉語が選定されるのが常であり、「和同開珎」全体の意味を考える必要がある。そこで発行当時の社会情勢や政治状況を考察した結果、和同開珎が「天下和同して坤珍を開く」という意味であることが判明。これは和銅改元の詔の内容とも一致

し、和銅改元、和同開珎の発行、平城京遷都は、人心を一新するための三位一体の政策であった。したがって、和同開珎の読みは「ワドウカイチン」でなければならない。

◆山崎　健：古代都城における動物利用

古代都城から出土した動物遺存体からあきらかとなった多様な動物利用について、「食べる」、「運ばせる」、「祈る」、「使う」、「贈る」に分けて報告した。

「食べる」では文字資料には残りにくい食生活の実態を示し、「運ばせる」では都城造営という大規模事業が役畜にも支えられていたこと、「祈る」では興福寺南大門でおこなわれた祭祀に魚類の頭が使われていたこと、「使う」では動物の骨や角、皮が様々な素材となっていたことを説明した。最後に、「贈る」では海外から贈られた動物について紹介した。

◆脇谷　草一郎：水分移動解析による遺構の露出展示保存法の検討

発掘された状態で本物の遺構を展示する、いわゆる露出展示と呼ばれる方法によって、公開・活用に供されている土質遺構は多数存在する。しかし、中には塩類の析出や、乾燥による土の崩落などによって、劣化の進行が認められる遺構が散見される。本研究では、福島市所在の宮畑遺跡を対象として、現地の微気象、覆屋内部の温熱環境、そして遺構土壌の含水率に関する環境調査と、遺構土壌の水分移動特性に関する試験を実施した。得られた結果に基づいて、遺構土壌の含水状態変化について数値解析をおこなった。ここでは特に覆屋内空気の換気回数に着目して、遺構土壌を適切な含水状態に維持し、塩の析出を抑制し得る環境の制御法について検討した。

研究集会

◆庭園の歴史に関する研究会

2012年10月13日

文化遺産部遺跡整備研究室では、庭園についての調査研究をおこなっており、2011年度からの第３期中期計画においては、中世の庭園に取り組んでいる。2012年度は、10月13日に「禅宗寺院と庭園」をテーマに、『庭園の歴史に関する研究会』を平城宮跡資料館小講堂で開催した。

研究会には庭園史学・造園学の研究者のほか、国文学、美術史学、建築史学等の専門家が参加し、いろいろな角度から禅宗寺院と庭園について検討した。研究会の前半は各分野の研究者が研究発表を、後半はそれらの発表をふまえて討議をおこなった。

研究発表では、西芳寺庭園の一部分にある石組の作者、庭園と山水画の関係、禅僧夢窓疎石の事績を中心とした禅宗と庭園のかかわり、日本における禅宗伽藍と庭園の関係、日本と南宋の禅宗寺院建築および庭園など、さまざまな観点からの報告が５つあった。

総合討議では、「日本と南宋の禅宗伽藍および庭園」「禅僧夢窓疎石」「山水画と庭園・仮山」の３つのテーマを中心に意見が交わされた。

また、この研究会の報告書を2013年３月に刊行した。

◆古代官衙・集落研究会（第16回）

2012年12月７日～８日

本年度は、「塩の生産・流通と官衙・集落」をテーマに研究集会を開催した。

研究報告は、馬場基「古代の塩の生産・流通をめぐって」、羽鳥幸一「瀬戸内の製塩と流通について」、新名強「古代東海地方における製塩状況」、高橋透「東北地方における古代の塩の生産と流通」、松葉竜司「若狭・北陸の製塩と流通」、神野恵「都城の製塩土器」の６本と、森泰通氏によるコメント１本である。総合討議では金田明大氏の司会により、塩の製塩・流通の多岐にわたる論点について活発な議論が交わされた。

参加者は地方公共団体・大学関係者等124名で、アンケートでは98％が有意義であったとの回答が得られた。またこの研究集会の研究報告を2013年度に刊行する予定である。

なお、2011年度におこなった研究集会の研究報告『四面廂建物を考える』を編集・刊行した。（小田 裕樹）

◆保存科学研究集会

2012年12月17日

遺跡から出土する繊維製品に対する研究は、その出土事例の増加と新たな調査技術の応用により、益々の進展をみせている。今回の研究集会では、近年の新たな調査成果と最新の研究の動向を共有し、古代繊織文化財の保存に役立てることを企図し、「古代繊織技術研究の最近の動向」というテーマを設定しておこなった。繊維文化財の保存科学的研究の草分けである佐藤昌憲先生の基調講演の後、６件の研究発表をおこなった。総合討議においては、古代繊織文化財の調査分析が保存という目的のために必要不可欠であること等、活発な意見の交換がなされた。この研究集会をきっかけに古代繊織文化財の調査および保存にかんする研究ネットワークが構築されたことはきわめて意義深いものといえる。

◆遺跡等マネジメント研究集会（第２回）

2012年12月21日～22日

2011年度に『自然的文化財のマネジメント』を検討した「遺跡等マネジメント研究集会」の第２回は、『パブリックな存在としての遺跡・遺産』をテーマとして開催した。

21日は、開催趣旨のほか、基調講演Ⅰ「遺跡管理における住民参加の意味を問う」、講演１「公共財としての遺産」、講演２「遺跡・遺産は地域住民にどのように認知されるのか」を踏まえ、《遺跡・遺産におけるパブリック概念》について検討した（討論Ⅰ）。

22日は、基調講演Ⅱ「パブリック、遺跡、遺産、文化財、考古学の関係について」のほか、「『パブリック』で考える歴史的市街地空間と人間の係わり方―世界遺産マラッカとジョージタウンの比較から―」、「産業遺産の公共性：その価値は何から生じるのか？」、「SEEDS of FURUSATO ～人々の心にある遺産～」の３つの事例研究報告と会場からの質問票を基に《パブリックな存在としての遺跡・遺産のマネジメント》を議論した（討論Ⅱ）。（平澤 毅）

◆文化的景観研究集会（第５回）

2012年12月14日～15日

第５回目となる今回の文化的景観研究集会（参加者約110名）では、「文化的景観のつかい方」と題して、地域づくりの文脈で文化的景観に取り組むには、実際にどういった仕掛けと活動がカギとなるのかを検討した。本研究集会はこれまで奈良を会場に開催してきたが、今回は、滋賀県立安土城考古博物館を会場として開催するとともに、近江八幡市からの後援も受けつつ、重要文化的景観「近江八幡の水郷」の現地見学会も実施した。

初日は、基調講演「滋賀県の文化的景観」をはじめとして、「文化的景観保護行政の現状」、「文化的景観と地域づくり」の２つの講演を実施した。２日目は、「高島の文化的景観の取り組み」、「文化的景観と里山保全」、「庁内連携での文化的景観保護」、「文化的景観と土木デザイン」の４つの報告の下、会場からの質問票にもとづき、価値の共有化、価値の伝え方等の論点を立て、ディスカッションをおこなった。

（惠谷 浩子）

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築
代表者・渡辺晃宏　基盤研究（S）継続

最終年度にあたる。木簡解読支援システムでは、文字の輪郭部に発生するノイズを効果的に吸収する画像処理手法や辞書セットの増強を通して、字形検索技術の高度化とシステム全体としての飛躍的な性能向上を実現し、Mokkanshopを改訂した。

研究拠点データベースでは、木簡字典は5カ年で約7700点、約42000文字の画像データを追加、外国語版（英・中・韓）も作成した。墨書土器字典は1年半で約1080点、約3200文字画像を公開。正倉院文書の文字画像DBの開発も進めた（奈良女子大学と共同開発）。また、『改訂新版日本古代木簡字典』、5カ年分の木簡ワークショップの記録を含む冊子体報告書を刊行した。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究
代表者・松井 章　基盤研究（A）継続

2012年度は16世紀の大分市大友府内町遺跡と、弥生時代の長崎県壱岐カラカミ遺跡出土の動物遺存体を報告した。前者では南蛮貿易によりブタが移入されていたこと、後者では野生と飼育されたイノシシが混在する可能性を指摘した。

海外調査では、11世紀以降、ベトナム王朝の都城であったタンロン皇城跡と、中国浙江省文物考古研究所、南京大学、上海市博物館において動物遺存体を調査し、今後も共同研究を実施する予定である。民族考古学的研究は、ラオス国コクナン村と、ベトナムのマイチョウ村において、少数民族の伝統的家畜飼育技術と狩猟活動について調査をおこなった。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発
代表者・金田 明大　基盤研究（A）新規

追加配分により11月より開始した。遺跡探査の有効性があきらかになり、依頼が増加する中、広範囲を迅速かつ詳細に探査する技術の必要が高まりつつある。また、震災復興をはじめ、早期の活用が望まれている。このため、これらに対して有効な手段として、近年出現したアレイ式の機器の利用と、これを有効に利用するための位置精度取得の向上を主な目的として研究を進めている。本年度は磁気探査機器の設計と地中レーダー機器の試験を実施し、後者では礎石建物の礎石の形状や状況等を迅速に捉えることができた。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究
代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

本研究は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から移動した状態で現在保管されている資料群の性格を追求するものである。2012年度は、新修東大寺文書聖教の調査をおこない、資料整理・データ入力を進めた。また、その中の絵図資料について、大判カメラで写真撮影を実施した。近世奈良町の絵図などは、興味深い内容を含んでいる。また、中村準一寄贈文書中にある明治維新期の日記について、翻刻・校正作業を進めた。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造・物性の解明
代表者・北田 正弘　基盤研究（B）継続

本研究では、主に透過電子顕微鏡を用いて文化財および美術工芸品のナノサイズの微細構造と関連物性の研究を進めている。2012年度は、ヒッタイトの銅製品、日本刀、油画顔料、陶磁器顔料、古墳材料等の観察と解析をおこなった。ヒッタイト製銅は磁性を示し、銅中に鉄ナノ粒子が存在した。日本刀では備前長船勝光刀の微細構造をあきらかにした。Ti化合物の存在が特徴である。柿右衛門焼では、酸化鉄と金ナノ粒子などの微細構造を解明した。古墳材料では、高松塚古墳の赤と黒顔料粒子の結晶を同定し、漆喰の水によるトンネルの形成をあきらかにした。

◆中国細石刃文化の基礎的研究―河南省霊井石器群の分析を中心として―
代表者・加藤 真二　基盤研究（B・海外）継続

2013年1月にフランス・パリに所在する古生物・人類学研究所（IPH）でおこなった、ド・シャルダン師らが発掘した寧夏回族自治区水洞溝遺跡、内蒙古自治区シャラオソゴル遺跡の資料の調査後、2月に河南省文物考古研究所で霊井、河北省文物研究所で河北省于家溝、南荘頭、香港中文大学で広東省西樵山の資料調査をおこなった。霊井石器群の調査では、必要な実測図製作を完了させるとともに、石材調査を実施した。その結果、石英岩、砂岩製の大型石器をのぞくと、石製品、細石刃などの石材は、いずれも燧石、珪質岩等に分類されるものであることが判明した。また、これまでの研究成果をもとに、李占揚河南省文物考古研究所研究員と連名で、『旧石器研究』第8号に「河北省許昌市霊井遺跡の細石刃技術―華北地域における角錐状細石核石器群―」を発表するとともに、アジア旧石器協会（APA）クラスノヤルスク大会（6月）、香港中文大学学術交流プログラム（25年2月）等の国際的な会議で報告をおこなった。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究
代表者・松村 恵司　基盤研究（B）新規

全国から6300枚近く出土している和同開珎を分析対象に、その生産と流通の解明を目的とした研究。4ヶ年計画の初年度にあたる2012年度は、和同銀銭の研究をおこなった。和同銀銭は、発行から使用禁止までが28ヶ月と短命に終わった銭貨であるが、律令国家の貨幣政策の歴史的転換の重要な役割を担った銭貨である。本研究では藤原宮の門膀木簡の検討を通して、和同銀銭と銅銭との交換比率が1対10であることをあきらかにし、長年にわたる論争に終止符を打つことができた。和同銀銭の全国集成では、35遺跡からの出土を確認し、出土状況や重量、字体等の属性を分析した。

◆青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究
代表者・難波 洋三　基盤研究（C）継続

昨年度発表した論文で、漢鏡には外縁付鈕2式以降の銅鐸と同程度の濃度でヒ素・アンチモンが含まれており、その大部分は原料銅の不純物であると指摘したが、本年度実施した兵庫県望塚銅鐸と漢鏡3面のICP分析により、これが一層明確となった。弥生時代の青銅器の金属原料については「輸入説」と「国産自然銅利用説＝ヒ素添加説」が長年対立しているが、いずれが正しいかで、弥生時代における朝鮮半島へと延びる安定的な長距離交易網の成立時期は変わり、それは近畿を中心とする地域の弥生社会の評価にも大きく影響する。よって、本年度の研究で「国産自然銅利用説＝ヒ素添加説」を明確に否定できたことは、極めて重要な成果である。

◆古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究
代表者・小池 伸彦　基盤研究（C）継続

2012年度は、本研究の最終年度にあたり、平城宮南東隅の冶金遺構について、その機能や性格の特質について検討を加えた。その結果、平城宮第32次補足調査出土の炉SL4162、冶金遺構SX4178・4195～4197は、周辺出土遺物や構造、層位などから、①SL4162は鉛あるいは銅の精製工程にかかわる冶金遺構、②SX4178・4195は下層の段階が鋳銅関連、上層の段

階が鉄鍛冶の冶金遺構、③SX4196・4197は用途が明らかでないが、SX4197は鉄鍛冶遺構の可能性が、それぞれ考えられた。SL4162は鉛分の付着する精製鉢形土器とともに、注目できる。

◆古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究

代表者・小澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、日本の古代律令国家における官衙と寺院がいかなる場所に造営され、占地上、どのような関係を有していたかを検討し、立地面の特性とそれが果たした政治的な役割を解明することを目的としている。四年目にあたる2012年度は、畿内および東海道・西海道諸国の官衙・寺院遺跡を主な対象として、資料の収集と分析をおこなった。

◆古代ガラス・釉薬から探る製作技術に関する科学的研究

代表者・降幡 順子　基盤研究（C）継続

研究の目的は、古代鉛ガラスおよび鉛釉陶器生産に関する技術的変遷を明らかにすることである。今年度は奈良時代に生産が開始される奈良三彩について、その生産初期段階の資料である奈良三彩と施釉瓦に、技術的な共通点があるのかどうかという点に着目して調査を行った。さらに8世紀後半から10世紀の渤海地域出土三彩陶器資料に対して調査を実施した。また10世紀頃に新たに出現するカリウム鉛ガラスにかんしては博多遺跡から出土したガラス質付着坩堝資料に対する分析調査から、初期には複数の鉛原料が用いられていることを確認した。

◆近世建築に使われた木曽ヒノキの流通に関する年輪年代学的研究

代表者・光谷 拓実　基礎研究（C）継続

本研究は、日本各地に所在する近世建築の用材のなかに、木曽系ヒノキが使用されているかどうかを年輪年代学的手法によってあきらかにし、当時の木曽系ヒノキの流通を復原的にあきらかにすることを目的とした。

2012年度は、京都府下の重要文化財建仁寺方丈、重要文化財石清水八幡宮外殿、重要文化財朝倉堂等の建築部材について調査を実施した。研究期間中の調査をとおして木曽系ヒノキは関西地域の各建物の建具類や化粧材等に多く使われていることをあきらかにした。

◆中国における木質文化財の用材観

代表者・伊東隆夫　基盤研究（C）継続

2012年度は、年度の途中で日中間の政治的問題により、しばらく研究計画が滞ったが、木彫像の新規調査をおこなうため、アメリカの神像研究者にメールで共同研究の申し出をおこない調査の協力を依頼した。やがて、共同研究をおこなうことで合意するとの通知を受けた。何度か調査の時期を調整した結果、年度替りにアメリカのミルウォーキー市に調査にいき、200体の神像彫刻から樹種同定用の試料を採取し、最終年度の研究に備えた。

◆古代東アジアにおける土木技術系譜の復元的研究

代表者・青木 敬　基盤研究（C）新規

本研究は、飛鳥・奈良時代をはじめとした寺院・官衙・墳墓に用いられた土木技術を復元することによって、律令国家の時代的特質を政治・外交史的観点から考察することを目的とする。具体的には、各種土木技術の系統をあきらかにするため、日中間における該当文献の収集と遺跡踏査による資料収集をもとに事例を分類し、系統づけることを目指す。研究初年度の2012年度は、中国を中心に文献収集をおこない、データ化を開始した。日本では東北・関東・近畿・九州、韓国では京畿道の遺跡踏査をおこない、事例収集を進めた。成果の一部は、『花開く都城文化』、『文化財論叢Ⅳ』、『古墳時代研究の現状と課題（上）』（同成社）、『東国の考古学』（六一書房）等の各書籍に論文として発表した。

◆中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究

代表者・鈴木 智大　基盤研究（C）新規

本研究は、2010年度よりおこなった「中世日本と中国における木造建築の架構システムに関する比較研究」（若手研究（B））を発展的に継続するものであり、木造建築の架構システムに着目し、日本・中国・韓国の比較をおこなうことで、東アジアにおける木造建築の技術およびその設計論理を解明する試みである。

4ケ年計画の1年目となる2013年度は、天津大学建築歴史與理論研究所の丁垚副所長とともに中国遼寧省・奉国寺大殿の現地調査をおこない、中国大規模な古建築の設計法について意見交換をおこなった。

◆東北アジアにおける金属器の拡散と在地社会の変化に関する考古学的研究

代表者・庄田 慎矢　若手研究（A）新規

本研究は、近年暦年代の根本的な見直しが進む東北アジアにおける金属器拡散のシナリオを再構成し、同地域における金属器受容の特性を人類史的に位置づけようとするものである。2年目にあたる2012年度は、金属器の拡散とともに広がる武器形儀器の出現と普及過程に着目し、東北アジア地域内での多様性を整理した。また、国際学会The 5th World Conference of the Society for East Asian Archaeology にてセッションComparative Studies of Skeuomorphs and Prestige Items in Early Metal Using Societies of Northeast Asia を組織し、自身および関心を共有する海外の研究者（カナダ、オーストラリア、ロシア、韓国）による研究成果の整理および討論をおこなった。

◆東アジアにおける失蝋法の出現と展開に関する考古学的研究

代表者・丹羽 崇史　若手研究（B）継続

本研究は、東アジアにおける失蝋法技術の出現・展開過程とともに、各地における鋳造技術の技術基盤の解明を目的とする。

本年度は、中国湖北省（4月19日～26日）、米国東海岸地区（11月18～28日）ならびに日本国内の機関が所蔵する関連資料の調査を進めた。3月15・16日には従来の仮説を検証するための鋳造実験を芦屋釜の里（福岡県芦屋町）にて実施した。また、SEAA5（西南学院大学、6月9・10日）、東亜古代青銅冶鋳業国際論壇（中国安陽市、9月1・2日）、日本中国考古学会大会（九州国立博物館、12月15・16日）で研究報告をおこない、『文化財論叢』Ⅳに成果の一部を発表した。

◆古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）継続

本研究は、古代都城の成立と共に設置されたと考えられる都城の「葬送地」の実態について考古学的にあきらかにすることを目的とする。

研究最終年度にあたる2012年度は、中国西安の唐皇帝陵および長安城周辺の墓地を踏査し、国内の補足調査として多賀城周辺の遺跡踏査・資料調査をおこなった。これらの調査成果を踏まえて、本研究を総括し、古代都城における「葬送地」のあり方について考察をおこなった。

なお、本研究成果については、今後論文にまとめ、公表する予定である。

◆絹文化財の簡易的な劣化指標の作成

代表者・赤田 昌倫　若手研究（B）継続

2012年度は昨年度から引き続いて、微粉末化した出土絹試料と、強制劣化させた絹試料の状態観察、成分分析について調査

をおこなった。成分分析は中赤外（MIR）と近赤外（NIR）分光分析を採用した。その結果、絹の微粉末化の発生は、フィブロインの結晶質を構成するC-N、N-Hの分子結合の切断や崩壊によることを確認することができた。また、劣化の初期段階においてはamorphousの比率が増大するが、その後は結晶質の比率が増大することがわかった。このデータは出土繊維の材質調査や、保存処理に必要な絹の強度調査について役立てることができる。

◆土質遺構保存のための基礎的研究―動水勾配を利用した塩類析出抑制法の開発―

代表者・脇谷 草一郎　若手研究（B）継続

本研究は水の供給によって１）遺構土壌の形状安定化、および２）可溶性塩類のリーチングをおこなうことで土質遺構の安定な露出展示保存法の開発を目指すものである。

2012年度は、露出展示状態にある福島市宮畑遺跡において、環境調査と熱水分移動の数値解析をおこない、実測値と数値解析の結果を比較検討して解析モデルを構築した。得られた解析モデルから、宮畑遺跡の遺構土壌を適切な含水状態に維持し、塩の析出を抑制し得る環境の制御法について検討した。

◆東アジアにおけるインド・パシフィックビーズの材質と流通に関する科学的研究

代表者・田村 朋美　若手研究（B）継続

本研究は、日本で出土するガラス小玉の非破壊元素測定をおこない、基礎ガラスの材質と着色剤の関係からその歴史的変遷についてあきらかにすることを目的とする。日本で出土するインド・パシフィックビーズは色調によって出現時期が異なり、弥生時代と古墳時代の両時期に出現するのは、黄緑色、赤褐色、淡紺色等一部の色調に限られる。弥生時代のインド・パシフィックビーズの分析を進めた結果、黄緑色と赤褐色のものは、弥生時代と古墳時代とで基礎ガラスの化学組成に差異が認められた。生産地が変化した可能性を示す重要な知見である。

◆令前木簡と古代文書の機能論的検討による日本における古代文書行政成立史の研究

代表者・山本 崇　若手研究（B）継続

本申請研究は、研究がまだ途についたばかりの令前の文書木簡を主たる対象とし、日本における文書行政の成立過程をあきらかにせんとするものである。最終年度にあたる2012年度には、埼玉県、鳥取県、石川県の出土木簡を対象として熟覧調査、写真撮影をおこなった。また、これまでの調査成果をふまえ、地方出土の令前文書木簡の釈文を訂正したほか、令前の紙の文書と木簡の関係を考究する総論的な論考「オシテフミ考」を著した。

◆九州における更新世末の移動・居住システムの変遷過程に関する研究

代表者・芝 康次郎　若手研究（B）継続

本研究は、九州の後期旧石器時代から縄文時代移行期の移動・居住システムについて、石器技術、石材消費の観点から究明するものである。2012年度は後期旧石器時代の通時的な黒曜石消費および遺跡分布に関する研究をおこなった。その結果、黒曜石利用では、後期旧石器時代後半期前葉および末葉の２回の画期があることがあきらかとなった。また、黒曜石を含む石材利用や石器群構造と連動して遺跡分布、立地が変化していることをつかむことができた。これらの成果については、日本旧石器学会および明治大学黒曜石センター主催のシンポジウムで公表した。

◆奈良時代の中央と地方における建築技術の研究

代表者・海野 聡　若手研究（B）継続

本年度は倉庫建築の屋根架構について検討した。通常、隅木は梁・桁に対して45度の方向とするが、倉庫建築については、この隅木の方向を変える振隅という技法が用いられたことが、修理工事を通して知られている。

この振隅について検討したところ、振隅が奈良時代の校倉に限定して用いられる手法であること、二方向に出す組物との関係が深いことがあきらかとなった。地方においても多く検出される総柱遺構を検討するうえで重要な成果である。この成果を日本建築学会関東支部研究会において発表した。

◆近世建造物の年代測定を目指したツガ年輪パターンの拡充と産地推定

代表者・藤井 裕之　若手研究（B）継続

2012年度も奈良県橿原市称念寺、同葛城市當麻奥院で調査を継続したほか、四国産の年輪パターンを収集する目的で、愛媛県松山城、同内子町上芳我家住宅、高知県大豊町旧立川番所書院の現用木部材から年輪計測用画像を取得した。また、前年度積み残しの高知城、宮崎県椎葉村産材等も加えてデータ処理を進めた結果、現生－古材間の接続は未達成ながらも、既存パターンの延長と産地推定に資する成果を得ることができた。なお、高知城にかんする成果は、2013年７月開催の日本文化財科学会第30回大会で発表する予定である。

◆木彫仏像を中心とした日本彫刻史研究における年代決定法の調査・研究

代表者・児島 大輔　若手研究（B）継続

本研究は、木彫仏像を中心とする彫刻作品の年代情報を集積し、年輪年代調査結果と従前の研究によって得られた年代観を対照することで彫刻史研究における制作年代推定の精度を高めることを目的としている。

２年目の本年度は美術院国宝修理所の協力を得て修理中の仏像等の年輪年代調査をおこなったほか、埼玉県最勝院十一面観音菩薩坐像等の年輪年代調査結果報告をおこなった。また、年代情報の収集と調査手法の研究の一環として、旧奈文研美術工芸研究室によって作成された仏像納入文書調書を現在所蔵する駒沢女子大学図書館において閲覧・調査した。

◆GT-Map等時空間解析システムを利用した木簡等出土文字資料分析の基礎的研究

代表者・馬場 基　若手研究（B）継続

木簡記載地名の抽出と、数値化作業を継続した。作成したデータの一部は、科学研究費補助金基盤Ｓ「木簡等出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築」で開発している木簡画像データベース・木簡字典に反映させ、公開した。

また、木簡内容分析の基礎作業の一貫として、食品名についての整理作業をおこなった。

◆三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究

代表者・廣瀬 覚　若手研究（B）継続

本研究は、三次元計測の手法を用いて、飛鳥時代の石材加工にかんするデータを収集し、当該期の石工技術を詳細かつ体系的に復元することを目的とする。２年目となる2012年度は、羽曳野市野中寺所在のヒチンジョ池西古墳出土横口式石槨、ならびに飛鳥藤原地域出土の基壇外装石（豊浦寺、大官大寺ほか）の三次元レーザー測量調査を実施し、古墳と寺院・宮殿間で二上山白色凝灰岩の加工技術を比較・検討した。また、研究成果の一部を『文化財論叢Ⅳ』、『奈文研紀要2013』において公表した。

◆古代における骨角製品の動物考古学的研究

代表者・丸山 真史　若手研究（B）継続

本研究は、古代から近世の骨角製品について、生産体制や生産者（職人）の社会的

立場の変遷をあきらかにすることを目的としたものである。従来の骨角製品（骨角器）の研究は先史を主流としており、古代以降について注目される機会が少なかった。本研究の２年目は、畿内における骨角製品の研究初年からの集成が終了し、器種や素材の時期的な変遷をあきらかにするためにデータの整理をおこなった。また、現生のニホンジカの四肢骨を素材として、中世遺跡から頻出する笄の模擬製作をおこなった。

◆南洋群島の戦争遺跡の保存と活用：特に水中文化遺産に重点をおいて

代表者・石村 智　若手研究（B）新規

本研究の目的は、日本が国際連盟委任統治領として1922年から1945年にかけて統治した南洋群島（現在のミクロネシア地域）に残る、日本統治時代の遺構および第二次世界大戦に関連する戦争遺跡を調査し、その実態を解明することである。特に同地域に多数存在する沈没艦船などの水中文化遺産の把握に重点をおく。

2012年度はパラオ共和国において陸上・水中の関連遺産の総合的調査を実施するとともに、住民からの聞き取り調査も実施した。またミクロネシア連邦ポンペイ州においても予備的な調査を実施した。

◆弥生時代の地域間関係と青銅器の受容

代表者・石橋 茂登　若手研究（B）新規

本研究は弥生時代の青銅器を主な分析対象として、遺物の移動を通じて青銅製祭器の受容の実態をあきらかにすることを目的とする研究である。

2012年度は基礎的なデータ収集と資料調査を主に実施した。千葉県、静岡県、愛知県、三重県、和歌山県等で資料調査を実施した。それら調査のうち、銅鐸出土地を踏査した結果をもとに論文「銅鐸埋納地の占地について」（奈文研『文化財論叢Ⅳ』）を執筆し、公表した。2013年度はさらに資料調査をすすめる予定としている。

◆甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究

代表者・川畑 純　若手研究（B）新規

本研究の目的は、古墳時代の甲冑編年を型式学的な分析視点から再構築し製作順序を仮定することで、資料の製作順序と一括資料中における扱いとの間に関連があるのかどうかをあきらかにすることである。

2012年度は本研究の初年度であり今後の調査のための必要機材を購入し、文献と基礎データの収集を中心に作業を進めた。７月には新潟県飯綱考古博物館において、11月には愛知県名古屋市博物館、長野県松本市立考古博物館において甲冑の資料見学をおこない、観察所見の調書作成・実測図の作成・写真の撮影をおこなった。

◆茅葺屋根の多様性とその成立過程に関する研究

代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）新規

本研究は、茅葺屋根およびその葺き方について、失われつつある多様性をあきらかにし、それぞれの茅葺方法の特徴や成立過程について考察するものである。2012年度は、『地蔵菩薩霊験記絵』（根津美術館蔵）に描かれる茅葺作業の様子に着目し、国選定保存技術保持者（茅葺）への聞き取りを交えながら、中世における葺き方や道具について考察し、その成果を『文化財論叢Ⅳ』で発表した。「日常道具の転用から専門道具へ」、「使い捨てから恒久化」という茅葺道具における変遷の基本的な流れを確認した。

◆平城京木簡と飛鳥藤原京木簡の字形比較

代表者・井上 幸　奨励研究　新規

木簡にみえる各字形を対象とし、これまで取り組んだ平城京木簡の字形に、飛鳥藤原京の字形を加えて収集し、筆画の構成を整理した。特に、中国唐代の正・俗・通字規範を示した『干禄字書』との比較をおこない、当時の正字よりも俗・通字に該当する場合が多いことを確認した。また、飛鳥藤原京木簡にみられる、画を大きく省略する書き方についても検討を加えた。これらの成果は、中国文字学会などで口頭発表した。飛鳥藤原京の字形が、中国大陸あるいは朝鮮半島のいずれの時期、文字資料との相似点が多いのか等、今後さらに検討したい。

◆文化や歴史を通じてこれからの生きかたを探求する新しい学びの構築に向けた実践的研究

代表者・渡邉 淳子　奨励研究　新規

新しい学びのかたちを考えるため、さまざまな分野の人が集い既存の枠にとらわれず思考探究する場を設けた。そこから生まれた発想をもとに、大学生を対象としたプログラムを実践し、身近な文化や歴史、生活を自分自身の目で見つめなおし、考え、伝える方法について検討した。

また石川県能登島向田の火祭を準備段階から調査し、若い世代が社会性を身につけていくしくみを掘りおこし、伝統的な祭礼や風習のなかに、これからの学びのありかたのヒントを抽出することができた。

◆東アジア都城出土瓦の考古学的研究

代表者・中村 亜希子　特別研究員奨励費　新規

2012年度は渤海国西古城遺跡出土瓦の検討、及び７世紀日本における瓦の三次元計測をおこなった。前者は、近年出版の報告書の分析と、上京や東京での瓦の出土状況との比較検討をおこなうことによって、度々議論の的となってきた当該遺跡が、８世紀半ば以前に王都が置かれた顕州の都ではなく、渤海において五京制が施行された以降の中京顕徳府治のものであることをあきらかにした。また、渤海における通時的な造瓦技法の変遷を提示した。後者では、瓦当の三次元計測が、紋様配置の決定過程の解明や同笵確認において有効であることをあきらかにした。

◆異宗教の相剋により生じた社会現象の比較史的研究―古代仏教説話に見る伝統と革新

代表者・立命館大学文学部教授　本郷 真紹（山本 崇）　基盤研究（C）新規

本申請研究は、『日本霊異記』を対象に検討を進めてきた前採択課題を引き継ぎ、神仏習合等の諸現象が古代社会に与えた影響を、東アジア世界の同時代史との関係で再構築することを目的としている。2012年度は、『日本霊異記』中巻説話の検討を進めたほか、前採択課題と新規採択課題を通した成果物として作成する注釈書の原稿を入稿し、その校正作業に着手した。また、国東半島の古代寺院、仏教民俗資料等の現地調査をおこなった。

◆ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡のドキュメンテーション作成にかかる能力強化ワークショップ

代表者・石村 智　国際交流基金 文化協力（助成）プログラム　新規

ミクロネシア連邦ポンペイ州に所在する巨石文化の遺構ナン・マドール遺跡の保存とそのユネスコ世界遺産登録に向けた国際協力の一環として、2012年９月に現地で能力強化ワークショップを実施した。具体的には、現地で遺跡の管理に従事する政府当局者を対象に、遺跡のドキュメンテーション作成（遺跡地図の作成と遺構のインベントリー作成）について助言し、また遺跡保存管理計画（マネジメント・プラン）の策定について議論をおこなった。こうした取り組みは、持続的に遺産を保存・活用するための現地拠点の形成に一定の貢献を果たすと考えている。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2012年７月６・７日に第３回（通算24回）の文化財写真技術研究会の総会と研究集会を奈良文化財研究所 平城宮跡資料館講堂において開催した。

１日目：総会・研究会Ⅰ　文化財写真の保存～ガイドライン制定のあらまし～

講演「文化財写真の保存に関するガイドライン」の概要と目的（吉田英明氏；オリンパスイメージング（株）、中村一郎氏；奈良文化財研究所）

２日目：発表「カラービューイングフィルターキットの活用法」（井本昭氏）

研究会Ⅱ　文化財写真の保存～デジタル化にともなう保存実例～

発表「出土遺物の写真資料保存（土器立面撮影の基本）」（井上直夫氏；奈良文化財研究所）、「ガラス乾板・銀塩フィルムのデジタル保存（写真資料のスキャニング）」（川瀬敏雄氏；（株）堀内カラー）、「文化財写真のデータベース保存」（中村一郎氏；奈良文化財研究所）、デジタル画像のプリント出力保存（佐々木香輔氏；奈良国立博物館）

１日目は、（一社）日本写真学会との共同作業によって策定したガイドラインについて、目的と内容に関する事項を解説する講演をおこなった。

２日目は、テクニカルアドバイザーである井本氏の協力のもとで研究会が監修製作したフィルターキットの使い方を発表して頂いた。それに続いて、研究会Ⅱと題して、文化財写真のデジタル化にともなう保存にまつわる４つの事項について実演、発表をおこなった。

両日の発表を通して、アナログ技術とデジタル技術双方の特性を活かしたハイブリッド保存という考え方が、文化財写真の保存にとって重要であることを認識する機会となった。　（栗山 雅夫）

◆日本遺跡学会

2012年11月24・25日に、日本遺跡学会設立10周年記念大会を「大和の世界遺産と遺跡」をテーマに、平城宮跡資料館講堂にて開催した。

初日は、田辺征夫会長、松村恵司奈良文化財研究所長、坪井清足顧問の挨拶の後、岡田保良氏（国士舘大学教授）の「世界遺産と遺跡」と、山田法胤氏（法相宗大本山薬師寺管主）の「世界文化遺産薬師寺について」の２つの特別講演があった。

２日目は、森本理氏（奈良県地域振興部）「奈良県の世界遺産について」、大野玄妙氏（聖徳宗総本山法隆寺管長）、「世界文化遺産法隆寺について」、山口勇氏（奈良市教育委員会）「世界遺産『古都奈良の文化財』について」、福井良盟氏（大峯山竹林院住職）「紀伊山地の霊場と参詣道について」、山田隆文氏（奈良県地域振興部）「『明日香・藤原の宮都とその関連資産群』世界遺産登録に向けた取り組み」の５本の報告の後、舘野和己氏（奈良女子大学教授）を座長に討論をおこなった。

（青木 達司）

◆木簡学会研究集会

2012年12月１・２日、第34木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者166名）。

１日は、山本祥隆氏「2012年全国出土の木簡」と、最近木簡出土が相次ぐ鳥取県の事例に関する高尾浩司氏（（財）鳥取県教育文化財団）「鳥取県良田平田遺跡の調査と木簡」・玉木秀幸氏（同）「鳥取県坂長第７遺跡の調査と木簡」の報告があった。

２日は三好美穂氏（奈良市埋蔵文化財調査センター）「東大寺大仏殿北方地区の調査」、高橋学氏（太宰府市教育委員会）「太宰府市国分松本遺跡の発掘調査と木簡」の事例報告と、坂上康俊氏の国分松本遺跡の木簡についての研究報告「嶋評戸口変動記録木簡をめぐる諸問題」があった。

なお、会誌『木簡研究』第34号を編集・刊行した（編集担当：渡辺晃宏）。

（渡辺 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2013年３月２日・３日（日）の両日、第29回条里制・古代都市研究会大会が、「紫香楽宮と大仏造立」をテーマとして、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された。 延べ参加者数200名。１日目は、栄原永遠男氏による「木簡からみた紫香楽宮」と題した基調報告の後、鈴木良章「紫香楽宮関連遺跡の発掘調査」、畑中英二「甲賀寺にかかわる調査・研究の現状」、黒崎直「紫香楽宮中心遺構の変遷と性格」の３本の報告があり、最後に討議がおこなわれた。２日目は、調査レポートとして、平城京羅城門周辺、三重県松阪市朝見遺跡、史跡武蔵国分寺跡、史跡出雲国府跡、日向国府跡と、各地の条里・国府・国分寺に関する報告があり、報告内容に対して活発な質疑と討論がおこなわれた。　（青木 敬）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮跡の整備

平成22年の遷都1300年祭ののちも、にぎわいが続いている平城宮跡だが、次のステップに向けて国土交通省や文化庁による各種事業が展開しており、それらへの調査研究・協力・専門的見地からの助言をおこなっている。

まず、平城宮跡内では、国土交通省により、中央区朝堂院地区の造成、大極殿院西側に位置する雨水調整池の整備と排水路改修、これにともなう木材伐採、園路舗装の改修などの工事がおこなわれた。これらに対し、地下遺構への影響がないかどうかを確認するため、工事ごとに立会調査をおこなった。

また文化庁では、遺構展示館で露出展示している発掘遺構に、主として地下水と考えられる水の湧出によって蘚苔類が発生する問題の対策を検討しているが、平成24年度は仮設の排水路を設置する工事をおこなった。これについても国土交通省の工事への対応と同様、立会調査をおこなった。

平城宮跡の利活用および整備に関して、文化庁が主催する平城宮跡保存・活用連絡協議会、国土交通省が主催する平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会に出席し、専門的・技術的な援助や助言をおこなった。このほか、平城宮跡の発掘遺構等に関する各種情報を提供した。

第一次大極殿院の復原整備関連では、平成22年度から奈良時代の大極殿院を復原する作業をおこなっているが、平成24年度には計17回の復原検討会を開催し、あわせて国内外の類例調査をおこなった。平成24年度からは、新たに古代の建築塗装や彩色に関する調査研究、および出土金属製品に関する調査研究を立ち上げた。これによって、古代の塗装手法や、必要な部分に施す飾金具の意匠等の検討をおこなってゆく。　（箱崎 和久）

中国陝西省大明宮博物館における出土金属製品の調査

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業が実施されている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、その材料、劣化状態および劣化原因にかんする情報を得ることが重要である。

2012年度は、劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、天井石１、２および４の蛍光Ｘ線元素分析法による鉛の分布および星宿朱線および星（金色）の調査をおこなった。星宿が配置している部分に鉛が多く検出されている傾向が認められるものの、これにかんしては星宿の部分に鉛白を塗ったという解釈と星宿に用いられている金箔の部分の漆喰の状態が比較的良いために相対的に鉛が多く検出されているという解釈の２通りが考えられる。また、彩色部における現状での色情報の記録および蛍光Ｘ線元素分析ではあきらかとならない色材の同定に関わる情報を取得するため、西壁女子群像に対して可視分光分析をおこなった。黄衣部分についてはその分光スペクトルの特徴が黄土の分光スペクトルに比較的類似していることがあきらかとなった。いっぽう、赤衣についてはさらなる精査が必要である。黄色部分と赤色部分については、今後、引き続き、ほかの色材の可能性を探るため、種々の標準試料のスペクトルとの比較検討を進める予定である。

経年変化の記録撮影として、東壁３石、西壁３石、天井石４石および北壁に対して可視光と赤外光によるデジタルアーカイブスキャニングを実施し、高精細画像を取得した。また、紫外光によるデジタルアーカイブスキャニング装置および画像解析技術の開発研究をおこなった。　（高妻 洋成）

壁画の材料調査

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係の事業では、今後本格化する整備にむけて、石室封鎖前の最終的な考古学的調査と、保存科学的調査を実施した。

キトラ古墳の石室は、2004年５月に盗掘孔に石室進入装置を設置したため、南面の一部はそれに隠されて調査が及んでいなかった。今回は石室進入装置を取り外し、装置により覆われていた盗掘孔周囲を中心に、石室南端及び墓道部分の写真撮影、三次元レーザースキャニング、加工痕跡の拓本採取などを実施した。

石室の構造に関しては、天井石、西側壁石、南側壁石相互の合欠の形状や状態などについて、石室構造を精査した。その結果、これまでの認識と相違がないことを確認し、それらを実測、計測作業により記録した。

盗掘孔周囲に関しては、これまで詳細な写真やデジタル記録がなかったため、写真撮影と３Ｄ測量をおこなった。これにより、高精細な画像データとデジタルデータを取得した。あわせて、天井石と南壁石の南面において、進入装置により隠れていた部分を中心に、拓本による石材加工痕跡の記録作業を実施した。昨年度調査（飛鳥藤原第170次調査）で採取した拓本とあわせ、天井石と南壁石南面全体の状態を記録できたこととなる。

石室内には石材の加工のための朱線が残っていることがこれまでの調査で判明しており、今回再確認したところ、昨年度調査の時より石室内の状態が良好であったため、新たに51ヶ所で朱線を確認した。これにより、確認できた朱線の総数は117ヶ所になる（最長のものは41.2㎝、最短のものは１㎜）。同一直線上にのるものを１本として算出すると、確認できた朱線は24本分になる。

また、壁画の保存修復（劣化原因）については、蛍光Ｘ線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、可視・近赤外分光光度計による顔料調査、テラヘルツ分光イメージング画像の取得を実施した。石室石材の強度については、針貫入試験を実施した。

（玉田 芳英）

キトラ古墳石室内の写真撮影

発掘調査現地説明会・見学会

◆平成24年6月23日（土）

平城第491次（平城京左京三条一坊一坪）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
史料研究室　山本 祥隆
参加者652人　　調査面積1872㎡

◆平成24年9月15日（土）

平城第495次（平城京左京三条一坊一坪・二坪）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第三研究室　川畑 純
参加者635人　　調査面積1845㎡

◆平成24年11月23日（土）

飛鳥藤原第174次（藤原宮朝堂院朝庭）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
考古第三研究室　今井 晃樹
考古第二研究室　森川 実
参加者460人　　調査面積1850㎡

◆平成25年1月26日（土）

平城第500次（薬師寺食堂）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第三研究室　石田 由紀子
参加者714人　　調査面積1300㎡

◆平成25年3月30日（土）

平城第503次（平城宮跡東院地区）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第二研究室　小田 裕樹
参加者820人　　調査面積1015㎡

発掘調査現地説明会の様子

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保護・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2012年度は、専門研修12課程を実施した（2012年度文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数82日、研修生総数156名であった。

企画調整部および各研究部では、要請に従って地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2012年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物依存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として小澤毅（遺跡調査法論）・小野健吉（庭園文化論）・髙妻洋成（保存科学論）・清水重敦（文化的景観論）・松井章（環境考古学論）の５名がそれぞれの講義を担当し、全員が文化遺産学演習や共生文明学特別講義を担当した。

講義では、各教員の専門である、都城・寺院を対象とした歴史考古学、庭園史学、保存科学、文化的景観学、環境考古学等の講義・演習・実習等をおこない、また、文化遺産学を専攻する院生らは、授業以外も主として奈文研で研究・実習をおこない、必要に応じて各教員が指導にあたった。2012年度に在籍した院生は修士課程５名、博士後期課程５名（休学を含む）であった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、深澤芳樹（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査、坩堝や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践した。

奈良大学への教育協力

2012年度から「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講している。「文化財修景学」では、遺跡等の保護と整備に関する制度・歴史・理念・手法等について体系的に講義している。

2012年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡　縄文遺跡群
（岩手）	御所野遺跡　志波城跡
（宮城）	多賀城跡
（秋田）	胡桃館遺跡
（福島）	宮畑遺跡
（群馬）	上野国分寺跡　三軒屋遺跡　金井東裏遺跡
（新潟）	吹上・釜蓋遺跡
（石川）	金沢城　旧松波城庭園　真脇遺跡
（福井）	一乗谷朝倉氏遺跡
（岐阜）	郡上八幡北町伝統的建造物群　正家廃寺跡
（静岡）	新居関跡　遠江国分寺跡
（愛知）	瓜郷遺跡　東之宮古墳　名古屋城跡本光寺
（三重）	伊勢国分寺跡　北畠氏館跡庭園　久留倍官衙遺跡　斎宮跡
（滋賀）	大津市伝統的建造物群　慶雲館庭園　敏満寺石仏谷墓跡
（京都）	恭仁宮跡　城陽市史跡　元離宮二条城
（大阪）	百済寺跡　新堂廃寺等　鳥坂寺跡　旧西尾家住宅　観心寺境内
（兵庫）	法隆寺領播磨国鵤荘史跡　和田岬砲台　赤穂城跡　五斗長垣内遺跡
（奈良）	旧大乗院庭園　中宮寺跡　巣山古墳　平城京左京三条二坊宮跡庭園　大安寺旧境内　唐古・鍵遺跡　菖蒲池古墳　五條市伝統的建造物群　東大寺境内　尼寺廃寺跡　春日大社境内
（和歌山）	根来寺境内
（鳥取）	栃本廃寺跡　青谷上寺地遺跡　三徳山行者道
（島根）	旧堀氏庭園　出雲大社境内遺跡　津和野町伝統的建造物群
（岡山）	第二次山陽遺跡　備中松山城跡
（広島）	安芸国分寺跡　二子塚古墳
（徳島）	勝端城館跡　徳島県近代和風建築
（香川）	屋嶋城跡　快天山古墳　丸亀城跡
（福岡）	大宰府史跡　鴻臚館跡
（長崎）	原の辻遺跡　鷹島海底遺跡　端島炭坑
（大分）	大分元町石仏　長者屋敷官衙遺跡　的山荘附日本庭園　ガランドヤ古墳
（宮崎）	日向国府跡　飫肥城下町庭園群　蓮ケ池横穴群

2012年度　文化財担当者研修課程一覧

区分	課　　程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
専門研修	庭園・自然名勝等保存活用基礎課程	6月6日～6月12日	12名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	歴史的庭園の保護をはじめとして、名勝の調査および保存管理・修理等について、基本的な考え方から実務に至る基礎知識を習得することを目的とする研修	遺跡整備研究室	7日	22名	22名
	建築遺構調査課程	6月18日～6月22日	12名	〃	発掘調査にかかる建築遺構や出土建築部材に関して必要な、上部構造の専門的知識や発掘方法などについての研修	遺構研究室	5日	12名	12名
	自然科学的年代測定法課程	9月24日～9月28日	12名	〃	年輪年代法や放射性炭素年代測定法などを中心とする、自然科学的手法による年代測定に関する専門的知識と技術の研修	年代学研究室	5日	2名	－
	保存科学基礎Ⅰ（金属製遺物）課程	10月2日～10月11日	10名	〃	金属製遺物の材質および劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、金属製遺物の材質、劣化状態および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする研修	保存修復科学研究室	10日	6名	6名
	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10月11日～10月19日	10名	〃	木製遺物の樹種、木取りおよび劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、木製遺物の劣化状態および保存処理に関する基礎知識を取得することを目的とする研修	保存修復科学研究室	9日	6名	6名
	遺跡情報記録調査課程	10月23日～10月26日	16名	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存手法として、GISやデータベースの利用法・情報発信に関する基礎的な知識の取得を目指す研修	文化財情報研究室	4日	9名	9名
	土器・陶磁器調査課程	11月12日～11月16日	10名	〃	奈良文化財研究所所蔵資料を中心に、土器等を実際に観察しながら、遺物調査方法に関する専門的知識と技術の習得を目指す研修	考古第二研究室	5日	17名	17名
	遺跡探査外注課程	11月26日～11月30日	10名	〃	遺跡の発掘調査および保護を目的とした、非破壊的な手法による遺跡情報の取得方法についての専門知識の取得と実習による技術の習得を目的とする研修。写真判読から物理探査までを対象とし、『発掘調査のてびき』に準拠する	遺跡・調査技術研究室	5日	2名	－
	文化財写真課程	12月4日～12月14日	10名	〃	文化財調査における写真業務全般に関して、写真記録の重要性、撮影・保管活用についての基礎知識を講義、実習を通じて自家撮影処理/委託撮影処理・フィルム撮影/デジタル撮影にかかわらず高品質な写真資料を取得することを目的とする研修	写真室	11日	15名	15名
	報告書作成課程	12月14日～12月21日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	8日	30名	24名
	古文書歴史資料調査管理基礎課程	1月15日～1月18日	10名	〃	古文書・歴史資料の調査・管理等を担当する立場にあるが、当該分野に関する専門的教育を受けたことのない地方公共団体等の文化財担当者を対象に、基礎的知識の習得を目指す研修。古文書・歴史資料は史跡等の指定にあたっても重要	歴史研究室	4日	30名	19名
	文化的景観調査計画課程	1月21日～1月25日	12名	〃	文化的景観調査にこれから取り組む自治体担当者を対象に、文化的景観の概念、保護制度、調査手法および保存計画立案についての基礎知識を習得することを目的とする研修	景観研究室	5日	12名	11名
	生物環境調査課程	2月13日～2月21日	10名	〃	動物遺存体や植物遺存体など、環境考古学の基幹を構成する生物環境分野の最新の研究法とその成果に関する専門的知識と技術の取得を目的とする研修	環境考古学研究室	9日	6名	5名
	保存科学Ⅳ（遺構・石造文化財）課程	2月25日～3月1日	10名	〃	史跡整備における遺構および石造文化財の保存において、劣化の現状に関する知見、ならびに維持管理に要する整備後のモニタリング調査と、その結果に基づく劣化発生の予測をおこなうための劣化状態調査法および環境調査法に関する研修	保存修復科学研究室	5日	10名	10名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―」

2012年4月14日～6月3日

飛鳥時代の武器や武具について、近畿出土の事例を中心に概観した。ついで、飛鳥時代を代表する武人、阿倍比羅夫にスポットをあて、彼が対峙したとされる北方の蝦夷や粛慎の武器・武具（岩手県盛岡市上田蝦夷森１号墳、矢巾町藤沢狄森古墳群、北海道恵庭市西島松遺跡出土品、北海道のオホーツク文化の資料など）を展示した。また、比羅夫のもう一つの主戦場であった、百済救援の戦いについて取り上げ、倭軍と主敵であった新羅、唐連合軍との違いを示した。さらに、飛鳥時代後半に出現する飾り大刀である唐様大刀の出現と展開がもつ意義について考察を加えた。出土品に加え、武装した原寸大人形などを展示したことで、分かりやすい展示だったと好評を得た。なお、展示した秋田県小阿地出土の金銅装大刀については、所蔵する京都大学総合研究博物館などとともに、理化学分析、実測をおこない、成果を飛鳥資料館研究図録16として刊行した。

◆秋期特別展「花開く都城文化」

2012年11月1日～12月2日

奈良文化財研究所創立60周年記念事業として開催した。奈良文化財研究所がおこなっている中国、韓国との共同研究の成果を広く公開することを目的に、カウンターパートナーである中国社会科学院考古研究所、韓国国立文化財研究所とそのもとにある慶州、扶余の国立文化財研究所、それに国立慶州博物館から多数の出土文化財を借用し、７世紀から８世紀に日本、中国、韓国で花開いた都城文化と三か国での文化交流を紹介する展覧会を企画した。しかし、前・東京都知事による魚釣島の買い上げ案の発表を発端とする日中両国の関係悪化のあおりを受け、中国からの輸送許可が下りず、日本、韓国の２か国に視座を絞った展覧会として実施した。まことに残念であったが、映像や床面展示などの新たな手法を交えながら、83件という多くの出土文化財を韓国から借用して展示することができた。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2012」

2012年２月２日～3月3日

前年度の飛鳥地域での考古学的調査の成果を紹介する冬期恒例の企画展。今年度は、最近、高取町の与楽古墳群が史跡指定されることが決まったことを記念し、「渡来系氏族の奥津城」と題するミニ・テーマ展を企画し、最近、とみに注目が集まっている、与楽鑵子塚古墳、真弓鑵子塚古墳、沼山古墳など渡来系集団の首長墓の発掘成果を展示した。今後とも、飛鳥地域における考古学ならびに文化財保護の動向に注意を払い、それらを機敏に反映した展示をおこなっていきたい。

平城宮跡資料館の展示

◆奈良文化財研究所創立60周年記念・秋期特別展「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」

2012年10月20日～12月2日

年に一度の木簡の公開展示。今年度は奈文研が50年をかけて重点的に発掘調査をおこない、2011年に発掘調査報告が刊行されたばかりの平城宮第一次大極殿院に焦点を当てた。木簡のみならず、大型部材や多彩な遺物もあわせて展示し、大極殿の復原研究や殿院地区の調査の歴史に至るまで、文字通り大極殿院のすべてを紹介した。会期中の入館者は20,356名で、毎週金曜日には研究員によるギャラリートークをおこなった。

◆春期企画展「発掘速報展平城2012」

2013年3月16日～6月2日

奈文研が2012年に発掘した平城京内の３遺跡（平城京左京三条一坊一・二坪、薬師寺食堂、法華寺周辺）をとりあげて、成果を速報的に公表する企画展。今年度は「発掘調査員の頭の中を旅する」というテーマを設定し、それぞれ性格の異なる遺跡を調査する際の、研究員の思考をたどりながら会場を巡れるような展示構成とした。会期中の入館者数は39,179人で、毎週金曜日にはギャラリートークやクイズ大会をおこなった。

秋期特別展ギャラリートークの様子

2012年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は63頁	平城宮跡資料館（無料）	合　　計
38,854人	124,515人	163,369人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2013年３月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は155名を数え、平均して一人当たり１ヶ月に２～３日のガイド活動をおこなっている。

2012年度における活動については、定点５ヵ所の解説を中心に、予約受付した来場者への宮跡内ツアーガイドを充実させた。

奈良文化財研究所としては、平城宮跡を広く一般に理解しもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の提供など積極的な支援をおこなった。

また、ボランティアガイドの活動をさらに広報し、より多くの方に平城宮跡へお越し頂くようチラシ、機関誌も発行した。

平成24年「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数　309日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
25,030人	26,713人	10,614人	22,836人	8,893人	7,579人	101,665人	3,911人

＊活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2013.3.31現在

奈文研概要掲載文書

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、本庁舎図書資料室は一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌及び展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、PDF化をおこない、インターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧	2012年度アクセス件数
木簡データベース	22,791
木簡画像データベース【木簡字典】	17,570
木簡字典くずし字連携検索	64,663
墨書土器字典（2011年12月より）	9,116
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,154
軒瓦データベース	1,422
遺跡データベース	7,650
地方官衙関係遺跡データベース	2,757
古代寺院遺跡データベース	2,739
官衙関係遺跡整備データベース	802
遺跡の斜面保護データベース	1,778
発掘庭園データベース	1,127
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	1,298
OPAC所蔵図書データベース	49,004
報告書抄録データベース	7,746
薬師寺典籍文書データベース	1,070
大宮家文書データベース	502

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所　学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復元的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1954）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1956）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1957）
第６冊　中世庭園文化史（1958）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1958）
第８冊　文化財論叢Ⅰ（1959）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1959）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1960）
第11冊　院の御所と御堂―院家建築の研究―（1960）
第12冊　巧匠阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査（1965）
第18冊　小堀遠州の作事（1965）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1967）
第20冊　名物烈の成立（1967）
第21冊　研究論集Ⅰ（1971）
第22冊　研究論集Ⅱ（1973）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査（1974）
第24冊　高山―町並調査報告―（1974）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ　内裏北外郭の調査（1975）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1975）
第28冊　研究論集Ⅲ（1975）
第29冊　木曽奈良井―町並調査報告―（1975）
第30冊　五條―町並調査の記録―（1976）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1977）
第32冊　研究論集Ⅳ（1977）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1977）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ　宮城門・大垣の調査（1977）
第35冊　研究論集Ⅴ（1978）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1978）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1979）
第38冊　研究論集Ⅵ（1979）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ　古墳時代Ⅰ（1980）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ　第一次大極殿地域の調査（1981）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ　馬寮地域の調査（1984）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1984）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1985）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1986）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1988）
第47冊　研究論集Ⅷ（1990）
第48冊　年輪に歴史を読む　―日本における古年輪学の成立―（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1990）
第50冊　平城宮発掘調査報告書XIII　内裏の調査Ⅱ（1990）
第51冊　平城宮発掘調査報告書XIV　平城宮第二次大極殿院の調査（1992）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1992）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1993）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊　―長屋王邸・藤原麻呂邸―発掘調査報告（1994）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ　―飛鳥水落遺跡の調査―（1994）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1998）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）
第59冊　中世瓦の研究（1999）
第60冊　研究論集Ⅺ（1999）
第61冊　研究論集Ⅻ（2000）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2000）
第63冊　山田寺発掘調査報告　本文編　図版編（2001）
第64冊　研究論集XIII（2001）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所　創立五十周年記念論文集（2002）

第66冊　研究論集XIV（2002）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2002）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査（2002）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査（2002）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査（2004）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ
第72冊　奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2004）
第73冊　タニ窯跡A6号窯跡発掘調査報告書（2004）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2005）
第75冊　中國古代の銅剣（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2007）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2008）
第78冊　近世瓦の研究（2008）
第79冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅰ
基壇・礎石（2009）
第80冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅳ
瓦・屋根（2009）
第81冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅱ
木部（2010）
第82冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅲ
彩色・金具（2010）
第83冊　平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査２　本文編／図版編（2011）
第84冊　平城宮発掘調査報告XVIII
第一次大極殿院地区の調査２　本文編／図版編（2011）
第85冊　漢長安城桂宮　報告編・論考編（2011）
第86冊　研究論集17
平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（2011）
第87冊　日韓文化財論集Ⅱ（2011）
第88冊　西トップ遺跡調査報告
―アンコール文化遺産保護共同研究報告書―（2011）
第89冊　四万十川流域　文化的景観研究（2011）
第90冊　Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site（2012）
第91冊　遼寧省朝暘地区隋唐墓の整理と研究（2012）
第92冊　文化財論叢Ⅳ（2012）

奈良文化財研究所　史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1954）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1955）
第３冊　仁和寺史料 寺誌編Ⅰ（1963）
第４冊　俊乗坊重源伝記集成（1955）
第５冊　平城宮木簡一　図版（1966）
解説（1969）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅴ）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1967）
第７冊　唐招提寺史料Ⅰ（1970）
第８冊　平城宮木簡二 図版（1974）解説（1975）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅷ）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1974）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1975）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1976）
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説（1977）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1977）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1978）
第15冊　東大寺文書目録第１巻（1978）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡三（1979）
第18冊　藤原宮木簡二（1979）
第19冊　東大寺分祖目録第２巻（1979）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第１巻（1978）
第22冊　七大寺巡礼私記（1981）
第23冊　東大寺文書目録第４巻（1981）
第24冊　東大寺文書目録第５巻（1982）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1982）
第26冊　東大寺文書目録第６巻（1983）
第27冊　木器集成図録―近畿古代編―（1984）
第28冊　平城宮木簡四（1985）
第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻（1985）
第30冊　山内清男考古資料１（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1991）
第34冊　山内清男考古資料４（1991）
第35冊　山内清男考古資料５（1991）
第36冊　木器集成図録―近畿原始編―（1992）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1992）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1994）
第41冊　平城京木簡一（1994）
第42冊　平城宮木簡五（1995）

第43冊　山内清男考古資料７（1995）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1995）
第45冊　北浦定政関係資料（1996）
第46冊　山内清男考古資料８（1996）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1997）
第48冊　発掘庭園資料（1997）
第49冊　山内清男考古資料９（1997）
第50冊　山内清男考古資料10（1998）
第51冊　山内清男考古資料11（1999）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（1999）
第53冊　平城京木簡二　長屋王家木簡二（2000）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2001）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2002）
第60冊　平城京条坊総合地図（2002）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2002）
第62冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉一（2002）
第63冊　平城宮木簡六（2003）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2003）
第65冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉二（2003）
第66冊　山内清男考古資料14（2003）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2003）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2003）
第69冊　平城京漆紙文書（一）（2004）
第70冊　山内清男考古資料15（2004）
第71冊　古代東アジアの金属製容器２　朝鮮・日本編（2005）
第72冊　畿内産土師器集成西日本編（2005）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2005）
第74冊　山内清男考古資料16（2005）
第75冊　平城京木簡三　二条大路木簡１（2005）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2005）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2005）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2007）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2007）
第80冊　平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院（2007）
第81冊　高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
第83冊　興福寺典籍文書目録（2009）
第84冊　山内清男考古資料17（2009）
第85冊　平城宮木簡七　図版・解説（2010）
第86冊　キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2010）
第87冊　明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
第88冊　藤原宮木簡三　図版・解説（2012）
第89冊　仁和寺史料　古文書編一（2012）

奈良文化財研究所　研究報告

第１冊　文化的景観研究集会（第１回）報告書（2009）
第２冊　河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
第３冊　古代東アジアの造瓦技術（2010）
第４冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
第５冊　文化的景観研究集会（第２回）報告書（2010）
第６冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
第７冊　文化的景観研究集会（第３回）報告書（2011）
第８冊　鞏義白河窯の考古新発見（2011）
第９冊　古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
第10冊　文化的景観研究集会（第４回）報告書（2012）
第11冊　河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）

奈良文化財研究所　基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1973）
第２冊　瓦編２　解説（1974）
第３冊　瓦編３　解説（1975）
第４冊　瓦編４　解説（1976）
第５冊　瓦編５　解説（1976）
第６冊　瓦編６　解説（1978）
第７冊　瓦編７　解説（1979）
第８冊　瓦編８　解説（1980）
第９冊　瓦編９　解説（1983）

飛鳥資料館　図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金剛仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金剛仏　銘文編（1976）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文編（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳―高松塚とその周辺―（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年（1982）
第10冊　渡来人の寺―桧隈寺と坂田寺―（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―（1983）
第13冊　藤原―半世紀にわたる調査と研究―（1984）

第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1994）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら―百済大寺（1998）
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（1999）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　‘あすか―以前’（2002）
第39冊　AOの記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2004）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城―キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2004）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2005）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2007）
第47冊　奇偉荘厳山田寺（2007）
第48冊　キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―（2008）
第49冊　まぼろしの唐代精華―黄冶唐三彩窯の考古新発見―（2008）
第50冊　キトラ古墳壁画四神―青龍白虎―（2009）
第51冊　三燕文化の考古新発見―北方騎馬民族のかがやき―（2009）
第52冊　キトラ古墳壁画四神（2010）
第53冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第54冊　星々と日月の考古学（2011）
第55冊　飛鳥遺珍―のこされた至宝たち―（2011）
第56冊　比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―（2012）
第57冊　花開く都城文化（2012）

飛鳥資料館　カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１―最近の出土品（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺 ―飛鳥最大の寺―（1985）
第９冊　高松塚の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と―最近の調査から―（1994）
第11冊　山田寺（1997）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書 ―みやこの漆紙文書の世界―（2006）
第16冊　飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2007）
第18冊　「とき」を撮す―発掘調査と写真―（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2008）
第20冊　飛鳥の考古学2008（2009）
第21冊　飛鳥の考古学2009（2010）
第22冊　小さな石器の大きな物語（2010）
第24冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第24冊　飛鳥の考古学2010（2010）
第25冊　鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―（2011）
第26冊　飛鳥の考古学2011（2012）
第27冊　飛鳥の考古学2012（2013）

その他の刊行物（2012年度）

・奈良文化財研究所紀要2012
・奈文研ニュースNo.45
・奈文研ニュースNo.46
・奈文研ニュースNo.47
・奈文研ニュースNo.48
・埋蔵文化財ニュースNo.150
・埋蔵文化財ニュースNo.151
・埋蔵文化財ニュースNo.152
・埋蔵文化財ニュースNo.153

・平城宮発掘出土木簡概報（四十二）
・奈良文化財研究所六十年のあゆみ
・地下の正倉院平城宮第一次大極殿院のすべて
・発掘速報展　平城2012
・奈良文化財研究所創立60周年記念特別講演会
「遺跡をさぐり、しらべ、いかす」
・日中韓 古代都城文化の潮流
・京都大学総合博物館所蔵　秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀の調査研究
・飛鳥資料館研究図録第16冊
・カンボジア王国アンコール遺跡群・西トップ遺跡遺跡保全プロジェクト
・ニューズレター６号、７号
・遺構露出展示に関する調査研究報告書
・『禅宗寺院と庭園』平成24年度庭園の歴史に関する研究会報告書
・重要文化財建造物現状変更説明
1950～1952（本文・図版編）
・ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村集落調査報告書
・『塩の生産・流通と官衙・集落』
・第16回古代官衙・集落研究会研究報告資料
・薬師寺旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅰ

人事異動（2012. 4. 1～2013. 3. 31）

●2012年4月1日付け

副所長（兼）都城発掘調査部長　深澤芳樹
都城発掘調査部副部長　杉山洋
研究支援推進部次長　上田浩司
研究支援推進部総務課長　石澤剛
研究支援推進部連携推進課課長補佐　車井俊也
研究支援推進部総務課総務係長　桑原隆佳
研究支援推進部連携推進課専門職員　米野元則
（兼）連携推進課広報企画係長　村上加代子
研究支援推進部連携推進課経営戦略係員　石橋明奈
企画調整部国際遺跡研究室長　森本晋
（兼）企画調整部文化財情報研究室長
文化遺産部建造物研究室研究員　大林潤
（兼）企画調整部企画調整室長　難波洋三
都城発掘調査部考古第二研究室アソシエイトフエロー
荒田敬介
都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフエロー
松下迪生
都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフエロー
中島咲紀

●2012年4月26日付け

任期満了退職　森先奈々子

●2012年6月1日付け

埋蔵文化財センター年代学研究室研究員
星野安治

●2012年6月30日付け

辞職　松本将一郎

●2012年7月1日付け

研究支援推進部総務課専門職員　江川正
（兼）研究支援推進部総務課財務係長　重光一夫

●2012年8月31日付け

辞職　清水重敦

●2012年9月1日付け

（兼）文化遺産部景観研究室長　小野健吉

●2012年9月16日付け

文化遺産部景観研究室アソシエイトフエロー
菊地淑人

●2012年10月31日付け

辞職　橋本美佳

●2012年12月1日付け

文化遺産部景観研究室長　平澤毅
（兼）文化遺産部遺跡整備研究室長　小野健吉

●2013年3月31日付け

定年退職　深澤芳樹
定年退職　松井章
任期満了退職　木村理恵
任期満了退職　飯田信男
辞職　水野裕史

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2012年度	2013年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	949,338	849,745
施設整備費	20,352	2,530,965
自己収入（入場料等）	34,637	34,983
計	1,004,327	3,415,693

土地と建物

単位：㎡

	土　地	建 物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2013年4月5日現在）

単位：千円

研 究 種 目	2012年度				（参考）2013年度			
	科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金		科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金	
	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額
基盤研究（S）	1	31,200	−	−	−	−	−	−
基盤研究（A）	2	19,890	−	−	3	27,950	−	−
基盤研究（B）	4	12,870	1	1,690	7	16,770	5	13,260
基盤研究（C）	5	4,550	3	4,680	1	1,040	7	9,620
若手研究（A）	1	2,340	−	−	2	2,210	1	1,950
若手研究（B）	9	7,670	8	9,620	1	650	15	16,445
奨励研究	2	1,100	−	−	2	1,200	−	−
特別研究員奨励費	1	1,200	−	−	1	1,200	−	−

受託調査研究

単位：千円

区　分	2011年度		2012年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
研　究	26	189,208	36	224,118
発　掘	8	77,030	8	95,547
計	34	266,238	44	319,665

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2011年度		2012年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
	11	7,910	9	5,664

※採択年による集計
※二ヵ年にわたる場合も初年度に計上

職員一覧

2013年4月1日現在

- 所長 松村恵司
  - 副所長 小野健吉
    - 研究支援推進部次長 上田浩司
      - 総務課長 石澤　剛
        - 課長補佐 村上加代子
          - 総務係長 桑原隆佳
        - 課長補佐 木村浩二
          - 財務係長 (兼)木村浩二
            - 主任 中野留美子
            - 係員 松岡広樹、高梨泰裕
      - 連携推進課長 田中康成
        - 課長補佐 松本正典
          - 経営戦略係長
            - 主任 高田幸恵
            - 係員 真嶋明奈
          - 広報企画係長 (兼)松本正典
          - 文化財情報係長 渡　勝弥
        - 課長補佐 (飛鳥・藤原地区担当) 車井俊也
          - 専門職員（飛鳥・藤原地区担当） 米野元則
      - 研究支援課長 今西康益
        - 宮跡等活用支援係長 江川　正
          - 係員 三本松俊徳
        - 施設係長 岩田真一
        - 専門職員 本光秀明
    - 企画調整部長 杉山　洋
      - 企画調整室長 加藤真二
      - 文化財情報研究室長 (兼)森本　晋
      - 国際遺跡研究室長 森本　晋
        - 研究員 石村　智／(兼)田村朋美
        - 特別研究員(AF) 田代亜紀子
        - 研究補佐員 佐藤由似
        - 任期付研究員 成田　聖
        - 特別研究員(AF) 渡邉淳子
      - 展示企画室長 (兼)加藤真二
        - 研究員 (育)西田紀子／丹羽崇史、中川あや
      - 写真室長 (兼)杉山　洋
        - 再雇用職員 (藤)井上直夫
        - 主任 中村一郎
          - 技術職員 (藤)栗山雅夫
        - 技能補佐員 鎌倉　綾
    - 文化遺産部長 林　良彦
      - 歴史研究室長 吉川　聡
      - 建造物研究室長 (兼)林　良彦
        - 研究員 鈴木智大
      - 景観研究室長 平澤　毅
        - 研究員 惠谷浩子
        - 特別研究員(AF) 菊地淑人
      - 遺跡整備研究室長 (兼)林　良彦
        - 研究員 高橋知奈津
      - 主任研究員 中島義晴
    - (兼)都城発掘調査部長 小野健吉 (担：平城)
      - 考古第一研究室長 (平)小池伸彦
        - 研究員 (平)庄田慎矢／芝　康次郎、(藤)和田一之輔／廣瀬　覚／諫早直人
        - 特別研究員(AF) (藤)山野ケン陽次郎
      - 考古第二研究室長 (藤)(兼)玉田芳英
        - 研究員 (平)青木　敬／小田裕樹、(藤)若杉智宏／大澤正吾
        - 特別研究員(AF) (藤)荒田敬介
      - 考古第三研究室長 (藤)清野孝之
        - 研究員 (平)石田由紀子／川畑　純、(藤)森先一貴
        - 特別研究員(AF) (平)中川二美、(藤)南部裕樹
      - 史料研究室長 (平)渡邉晃宏
        - 研究員 (平)山本祥隆、(藤)桑田訓也
        - 特別研究員 (平)井上　幸
      - 遺構研究室長 (平)箱崎和久
        - 研究員 (平)海野　聡／番　光、(藤)大林　潤／前川　歩
        - 特別研究員(AF) (平)井上麻香、(平)松下迪生、(平)中島咲紀
      - 主任研究員 (平)渡辺丈彦／馬場　基／神野　恵、(藤)降幡順子／山本　崇／黒坂貴裕／今井晃樹／森川　実
      - 専門職員 (藤)(兼)米野元則
    - 都城発掘調査部副部長 玉田芳英 (担：藤原)
    - 埋蔵文化財センター長 難波洋三
      - 保存修復科学研究室長 髙妻洋成
        - 研究員 脇谷草一郎／(兼)降幡順子、田村朋美
        - 特別研究員 辻本與志一
        - 特別研究員(AF) 赤田昌倫
      - 環境考古学研究室長 (兼)難波洋三
        - 研究員 山﨑　健
      - 年代学研究室長 大河内隆之
        - 研究員 星野安治
        - 特別研究員(AF) 児島大輔
      - 遺跡・調査技術研究室長 小澤　毅
      - 主任研究員 金田明大
    - 飛鳥資料館長 (兼)松村恵司
      - 学芸室長 石橋茂登
        - 研究員 (兼)(育)西田紀子／(兼)丹羽崇史
        - 任期付研究員 (兼)成田　聖
      - 庶務担当室長 (命)車井俊也

※(平)：平城地区
(藤)：飛鳥・藤原地区
(担)：地区担当
(育)：育児休業中
(兼)：兼務
(AF)：アソシエイトフェロー